



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

藤田俊二未発表原稿「誰れが悪いのでもない
-ある父子1960年から1994年2月までの日々-」：
本文及びその主題設定の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原, 国男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5382

**藤田俊二 未発表原稿「誰れが悪いのでもない
-ある父子1960年から1994年2月までの日々-」
-本文及びその主題設定の意義-**

河原国男

**Shunji Fujita 's Unpublished Manuscript 'No One Is to Blame':
The Significance of the Full Text and Its Theme-Setting**

Kunio KAWAHARA

本稿は、藤田俊二（1932-2014、昭和7-平成26）の未発表原稿「誰れが悪いのでもない-ある父子1960年から1994年2月までの日々-」（以下、原稿）の全文を紹介するとともに、その内容を分析して、主題設定の特徴と、この原稿が示す意義を考察するものである。

1. 成立事情

・藤田は、教護院時代の「北海道家庭学校」に寮長として奉職し、その30年におよぶ在職期（1963-1993、昭和38-平成5）を中心に、歴大な実践記録を残した（拙稿「北海道家庭学校寮長 藤田俊二年譜」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第27号、2012）。その実践記録（河原が現在、宮崎大学教育文化学部教育学講座で保管）は、1) 日誌（147名分）、2) 報告、3) 著作、4) 論説、5) その他（講演等）に分けられる（拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧」、同上紀要、第31号、2014、以下、実践記録一覧）。本稿がとりあげる藤田の原稿は、その記録のなかで、いずれの要素を含むゆえに、「その他」に区分したものである。この位置づけは、相対的に価値がすくないということの意味しない。むしろ、長期におよぶ実践の根底にかかわる主要な想念の一部を示していると推測される。

・原稿は、1箇所紐綴じされ、400字詰め原稿用紙157枚でまとめられている。藤田の日誌は大学ノートが使用され、すべて基本的にボールペンで記されて、ときに色鉛筆で「父さん来訪!」「大喝!」などと1頁全体に大書されている。この原稿は、鉛筆書きされ、字の大きさも、一定している。穏やかな字体で、清書されている。藤田が1993（平成5）年3月、北海道家庭学校を退職した後、郷里の大野町千代田（現在の北斗市千代田）の自宅で書き記されたものである。原稿一枚目（資料1）欄外には、「帰省してからなんとなく書いた原稿です」と鉛筆で記されている。脱稿日の記載はないが、藤田本人の記憶によれば、帰省したその年に書きあげられた。完成原稿である。

・当の原稿は、1981年8月11日入校と同時に、同日石上館に入寮し、1983年1月23日退校している少年についての記録に基づく。石上館に在籍した際に藤田が記述したこの少年についての

日誌は、全日誌に便宜上河原が付した整理番号89の日誌で、全3冊ある。この日誌は、入校同日の日付けより始まり、第3冊の日誌の1882年3月15日の記述で終わっている。この3月15日までの記述には、以後の処遇方針に関する言及はなく、中断し、空白の頁を残す形になっている。同月日に同じように中断している日誌が複数ある。15日の数日前に他の寮で無断外出があり、学校全体で対応していたことが日誌の記述内容からうかがえる。北海道家庭学校に現在保管される当該少年の教務記録によっても、この間の消息は明らかではない（2014年11月13日、現地確認）。日誌記述について、そうした中断の経緯を含むことに留意したい。

- ・原稿執筆の際、日誌は手元に置いて参照したものと推測される。原稿の内容は、日誌の記述内容に即して記述されている。3冊の日誌には、藤田自身による付箋が例外的につけられている。抽出に際して重要と思われた箇所をチェックしたものと推定される。

- ・原稿では、当該少年は「平川幸策」の名で記されている。とくに断ってはいないが、仮名である。少年が引き起こした出来事の場所、年月、等は、変更して記述されている。登場する他の少年の名も同様に仮名である。内容的に一部分であるが、創作されていると思われる箇所がある。

- ・少年が石上館に入寮していた1981（昭和56）-1982（昭和57）年の時期は、藤田が49-50歳で、「寮長二十年のくぎりに」（1983年11月）を全国教護院教護研修会で発表した頃にあたる。これまでの方針を総括し、確からしさをもって少年たちに日々接することできる境位に達していた。寮の少年に藤田が毎日求めた日記には、必要に応じておりおり藤田自身から題目を設定して、少年の一人一人の内面理解の手立てとしていたが、この頃はとりわけ積極的に働きかけていた。1979年：26件、1980年：20件、1981年：30件、といった題目設定件数であった。

- ・北海道家庭学校機関誌「ひとむれ」通巻480号（1981.9.1）には、「たゆたいの夏」と題して、当該少年が書いた日記の内容の一部が匿名で、抄録した形で引用され、藤田の文章とともに紹介されている。少年が寮生活していた同時期に、教護院関係者に限ってであるが、第三者とともに情報共有したいという思いを藤田は抱いていたものと推察される。

- ・原稿のタイトルは、本文でもふれられているように、萩原葉子『誰が悪いのでもない-明子は何処へ-』（1986）による。詩人萩原朔太郎の長女による自伝的作品で、妹の一生を記している。

2. 主題設定について

この原稿は何を主題にしたか。タイトルは主題を直接的に表しているであろう。そう予想できるが、しかし、このタイトル設定について、藤田自身では明確には説明してはいない。原稿のはじめの箇所で、上記書の典拠を明らかにし、共感したことを簡潔に記すにとどめている。同書の「あとがき」で作者（萩原葉子）は次のように記している。「幼い時の熱病が原因で、生涯の知恵遅れとなったのはいかなる星のもとに生まれたのか。哀れな運のない子供であった。親の不注意が悪いのだと責めてみたところで、どうなりもしない。運命だったと諦めるよりないのである。妹は、気持ちは小学生くらいでも、もう初老と言われる年で、開花しないまま凋んでゆく、咲かない花であった。…姉の私が代わりに、これを書くことで運のない一女性の上にも、ひとひらの花びらが咲くのではないか。私は、そう信じることで筆をおくことが出来た」。同書のタイトルとその内容は、藤田の原稿の主題にかかわる想念を表すものとして留意される。

30年の在職中、この少年が石上館で起居を共にしたのは、7ヶ月余であるが、とりわけ印象深く藤田の内面に刻印されていたと考えられる。そして、この想念の部分を明確にして、それ自身で完結し、第三者にも共有可能な資料として、藤田は1981年出会って十年後の1993年退職後、あらためてこの少年のことにむき合い、この原稿を作成したものと考えられる。「非行少年という少年はいない」という雑誌（『月刊社会教育』第455号、1994）に示された想念も、当該少年に特定して論じられたものではないが、この原稿のなかのものと同一体になるだろう。これと対比すれば、未発表原稿に示された想念の方が、より根源的なものに迫っている。

この原稿が示している主題設定の特徴を明確に把握するために、原稿とともに、日誌本体（整理番号89）の内容に即して検証する。原稿のなかに主題として抽出することを優先するならば、重要であるが主題から部分的に外れる要素は、原稿内容から除外されることになるだろう。除外されずとも、断片的な要素にとどまるだろう。以下、この主題設定の特徴とともに、主題そのものについて明確する。

原稿の内容は、事項として整理すれば、次のように構成（1～47）できる。日誌本体の該当する月日との対応関係を矢印で併記する。網掛け部分は、日誌には記述されていない部分である。あるいは、関係資料として添付されていない部分である。

1. 法的手続き

2. 新聞記事、投書

3. 題名由来

4. 入所初日での面談（1978.8.6）→日誌（1981.8.11）
5. 少年自身による最初の日記（8.10）→日誌（1981.8.15）
6. サロマ湖キャンプ（1978.8.13-14）→日誌、同日
7. 帰省が終わり寮に戻ってきた皆から一人離れての様子（8.18）→日誌、同日
8. 「自分の夢」についての日記（8.19）→日誌、同日に添付
9. 寮母セツ子夫人の感想（8.26）
10. 誕生会についての所見（8.30）→日誌、8.28
11. 寮生の一人一人の両親の状況（実父母か、継父母か、存命か）9.9
12. 「隣の優しいおばさん」宛ての手紙（9.13）→日誌、9.11
13. 継母からはじめての電話（9.14）→日誌、9.13
14. 父のはじめての来校。10分のみ。（9.16）→日誌、9.15
15. 将来の夢について（外国旅行、伝統工芸職人）9.19→日誌、同日
16. 継母から受けた嫉みに対する感謝の念（9.24）→日誌、同日
17. 継母に対する不満と事件との関連についての説明（9.26）→日誌、同日
18. 幼年期まで過ごし、実母の兄が居住する文京区への訪問。その兄の話。兄から見た義弟（少年の父）について。渋谷区に住む実母との面会（9.30）→日誌、同日（場所は相違）
19. 継母の来校。「幸策を自分の子として育てて来た」ことについて（10.4）→日誌、同日
20. 研修旅行で啄木の短歌を朗詠（10.6-8）→日誌、同日
21. 運動能力テスト（10.14）→日誌、同日
22. 少年自身による日記から。神仏について。信ずる宗教は小乗仏教であること。（10.25）→日誌、同日

23. 日記から。「僕が心から信じられるのは平川幸策、僕自身だけ」(10.26)→日誌、10.27
24. 事件を報道した新聞各紙についての本人の所見 (10.3ママ10.30か)→日誌、10.30
25. 父母を「父さん母さん」と呼ばず、「親」と呼ぶこと(11.1)→日誌、同日
26. 平和山登山の際に見せた「小さな微笑」の「清冽」さ (11.5)→日誌、同日
27. 頭に大怪我している坂下を殴ってしまったこと (11.8)→日誌、11.4
28. 父親の郷里の富山から叔父から電話。訪問の意向(11.20)→日誌、同日(東京の祖父から)
29. 収穫感謝祭での発表 (11.23)→日誌、同日
30. 叔父来校。「嬉々としてとして構内を案内」「みんな僕のことを心配してくれているのがよく分かり」(11.25)→日誌、11.29 祖父は来校せず。
31. 平和山にトップで登る (12.5)→日誌、同日
(暁闇の登山はドラマチックでいいと額の汗を拭いた)
32. 仙台に住む両親を訪ね、継母との面談。父とも、スナックで面会。仙台児童相談所所長と幸策の今後の方向について意見交換 (12.10-13)→日誌、同日(場所は、北海道内)
33. 全校学力テスト結果、国語1位、数学3位 (12.16)→日誌、12.14(国語1位、数学26位)
34. 同年の田中との対立 (12.18)→日誌、同日
35. 正月帰省見合わせ (12.21)→日誌、同日
36. 正月残留についての思い「今年1年の反省のために残る」(12.26)→日誌、12.25
37. 図書館から漱石「こころ」を借りて読む (12.27)→日誌、12.25
38. 年明けの礼拝での谷校長の講話について (1.10)→日誌、同日
39. 「次郎物語」の読書感想文を持参してきた。主人公に共感しながら充実した内容を記していること。「次郎と自分の人生をびったり二重映しにして今を生きている幸策の凜とした気概」(1.21)→日誌、同日
40. 田中の日記から。田中の幸策に対する肯定的評価 (1.28)→日誌、同日
41. 入校して7か月後の身長体重の変化 (2.1)→日誌、2.2
42. 進路についての職員会での合議決定、仙台児童相談所との相談協議。家族、富山への連絡 (2.13)
43. 雪像コンクール (2.27)→日誌、2.26
44. 谷校長講話「有神論と無神論」をめぐる感想 (3.7)→日誌、同日
45. 復学決定についての幸策への伝達 (3.10)
46. 卒業。最後の日記 (3.20)
47. 卒業後の動静を記す幸策からの手紙。文中にお経の引用。(1979.4~1994.2.26)

これらの内容事項の原稿を、当該少年について日誌全3冊と対比してみる。記述内容が示す細部の出来事の外形的な事実関係－身長、体重の記載、登場する少年の顔ぶれ、学科試験の校内順位など－ではなく、思想上の事実関係の異同がどうあるかに注意をむける。大別して次の形が着目できる。

- a：原稿には記述されていないが、日誌には記述されている要素。
- b：原稿にも、日誌にも、その具体的描写の濃淡はあっても、本質的に同一の側面が共通して記述されている要素。
- c：日誌には、記述されていないが、原稿には記述されている要素。

なお、少年の氏名が藤田の日誌中で記述されている箇所は、** (89) と表記した。89は、全日誌に少年別にあてた整理番号89を指す（拙稿、実践記録一覧、参照）。

a :

日誌に記述されている部分で、特徴的な一要素を以下に列挙する。

○「映画『連合艦隊』をみくる。

** (89) も段々皆と話す様になり、北見までの往復の車中、時々何がおかしいのかくくっと笑い合ったりして心和睦むものがあった。

映画の内容については、48才の僕には何か戦争中の映画を見ている様な錯覚さい感じられて、微妙な感慨がひたひたと胸をつつんだのだが、5人の感想は1人1人如何にもからっとして、35才も違う年令のことをしみじみ考えない訳にはいかなかった。

5人の中では、** (89) が一番意気こんで日記を持って来た。

『僕ね、わきにはみ出して下にも書いたんだよ』。

とにこにこしながら持って来ただけに、堂々とした戦争論は仲々の迫力だ。頭の良さがきらきら光っているし、背後に父親を感じさせる」(8.16)。

○「午後から酪農部のサイレージ応援に行ってきた。長いホークでの草積み、草をいっぱい積んだトラクターに乗って大きく揺れながらの往復、サイロの中での草ふみ！そのひとつひとつに歓声をあげては遊んでいた皆の中で、** (89) の静かな笑いはたしかに異質だった。暗く沈んでいるという訳ではないのだが、小さく皆のふざけ合いに眼をやるだけの** (89) の微笑…には、なんだか俗っぽい事をきっぱりと拒否する司祭の様な別の微笑があった様な気がしている」(9.25、資料2)

○「どの種目でも背筋をきっちり伸ばし、にこりともしな顔には古武士の矜持の様なものさい感じさせた** (89) の今日のチャレンジだった。たったひとつ、けんすい2回には流石の** (89) も照れ隠しの様につこり笑い、この笑い、なんとも言えない人間的なペーソスがあってほっとしたのだった」(10.14、資料3)。

○「ほとんど笑わない** (89) が、柏葉寮の時だけにと白い歯を見せて微笑したのが嬉しかった。** (89) をもっともっと笑わせること！ ** (89) をもっともっと怒らせること！
~~~~~

この2つが表裏一体として皆との暮らしの中に出てくる様になれば、\*\* (89) は次の少年期に入ることになる！」(10.15、資料3)。

○「『言いたい事』

「石上館は何故夜おそくまで電気をつけて勉強させてくれないのですか」

には眼をばちばちさせてびっくりしている。別に勉強するな！とも言った事はないのだが、夜6時半から7時半までの自習時間でお互いに充分じゃないの〜といった了解と感じがあって今迄来たのだが、この様に真正面から問われると何んだか僕が禁止して来た様な後ろめたい気持になってしまう。夜9時消灯は家庭学校のきまり、唯、時々寮によって補習させているという話は時々耳にする。\*\* (89) がこの様に勉強したいという意志で問いかけて来た以上それに答えるべきだなあ〜と思索しつつ、さてどうしたらいいかなあ〜？〜と時間と、電気と、灯油と、皆の反応を様々に思いめぐらしての夜ではある。」(11.21)

○「バスケット大会（第3週）

勝 1軍 楽山寮に18対2

勝 2軍 楽山寮に8対4

我が寮は1、2軍とも順当に勝ちすすみ、よりはいペースで勝ち続けている桂林寮、柏葉寮との上位争いがいよいよ面白くなって来た。3軍メンバーの\*\* (89)、\*\* (91)、\*\* (78) の3人はなんとなくそれでもつまらなそうに見ていた中で、2、3度小さく笑っていた\*\* (89) の、表情が何かとても嬉しかった」(12.2)。

○「この4、5日ぐっと冬型気候になり、今日などは夕方からぐんぐん温度が下って来て-10度にまで下り、めったに表情を崩さない\*\* (89) も流石になりふり構ってはおられないといった感じでぶるぶる腕を振らせていたのがむしろ人間的で、にっこり笑ったのだった」(12.3)。

○「今日の夕食はラーメン、僕を筆頭にラーメンは皆の大好物、\*\* (89) はそのラーメンを炊事場で食べられるという炊事手伝いに初めてなり、嬉しそうに食べていたのが微笑ましかった。この様な嬉しい思いを素直に見せたともを珍しいと思ひ、この様な場面を多様に作っていくことの大切さをしみじみ思った」(2.18)。

以上のように、日常生活のなかに“笑い”を積極的に見出そうとし、それが示すことば、表情、態度、の諸事実を細大もらず、克明に記述している事例がある。これらが、aに含まれるもっとも重要なものとしてとりあげることができる。それらが、原稿と対比した場合には、日誌本体の方にはより顕著に記されている。

b :

原稿・日誌ともに記述されている要素を以下に列挙する。

○「続々と皆が帰って来て賑やかになった寮の中で、なんとなく\*\* (89) だけが淋しそうに見えた…のだが、夜に日記を読んで、そのキラキラ光る感性にははっと胸をつかれている。

『平凡が非凡になる日が待ち遠しい』

\*\* (89) よ、

『家に帰ってる間は僕は自由なんですか?』

と結んでいる今日の言葉に僕は今は答え様もないが、これからじっくりと語り合っていかなければならない大きな命題がこの\*\* (89) の言葉には含まれていると受けとめているんだよ！」(日誌、8.18)

「…平川には他人からの気易い言葉がけや冗談などをきっぱり拒否する様な孤高の精神が早やあり、十三才とは思われない見事な個性が早やある。…」(原稿、8.18)

○「今日は夏休みが終わって初めて全校全員揃っての礼拝と朗読会、幸策にとっては初めての出席だけに物珍しそうに皆の様子に見入り、七人の作文朗読をじっと聞いていた。

『僕だってあの七人以上に、学び、全体的に成長し、短い期間で家庭学校を卒業し、立派な学生又は社会人になり、周りの人に迷惑をかけないで暮します。』

『僕だって』という語勢に幸策の少年らしい覇気と意気込みを感じて、思わずにっこりする。表面は全くにこりともしないで端然としている幸策だが、心は他の少年と同じかそれ以上に少年らしい素直さに満ちている」(原稿、8.23)。

「皆なが揃っての初めての礼拝堂での礼拝だった。\*\* (89) がどんな顔で座り続けていた

か知る由もないが、日記が厳しく胸をうつ。

『僕だって、あの7人以上に、学び、全体的に成長し、短い期間で、家庭学校を、卒業し、立派な学生、又は社会人になり、回りの人にめいわくな事をしないで、自分の回りで、めいわくな行動をしているような人には、その人のために進んで注意してあげたいです。』  
特に、僕だってという語勢が印象的だ』（日誌、8.23、資料4）。

以上のように、原稿と日誌と記述の内容には、共通して、当の少年のよさ、とくに寮生全員のなかでも際立っている人格、学力面の個性を見出している事例がある。なぜ「犯罪」事実が生み出されたか、という件も含め、どのように当の少年の「孤高」とも記される人格が形成されてきたか、という関心から導かれる、生育環境にかかわる探訪の記述も、このなかに含まれる。とりわけこの探訪の記述は具体的で詳細をきわめる。

c :

原稿のみに記述されている要素について。原稿内容として整理した47事項のうち、網掛け部分は、とくに2点ある。一つは、法的手続きによってどう罪が問われているか、そしてこの点に関連して報道機関、新聞読者等で、どう世間的に評価されているかという点、もう一つは、卒業とともに、その後の動静にかかわって、お経に親しむ近況の報告も含め、どのように本人自身がみずからの人生を振り返り受けとめているか、という点である。こうした記述は、参照される事実の断片はあったとしても、基本的には藤田による創作部分といってよい。お経は曹洞宗の「修証義」からだが、この引用も藤田の創作によるだろう。その部分だけに着目すれば唐突な印象を与える。けれども、おりおりの校長講話や藤田の設定した題目による日記などを含む原稿全体の事実関係—日誌で記述される事実関係にも合致している—を踏まえれば、自然の流れのように受けとめられる。そのような付加を含む原稿を通じて、藤田は3つの次元で罪過の問いかけと応答の局面を描いている。

1) 実定法上の法的規範において：

刑法41条で14歳に満たない者の行為は罰しないと定め、14歳未満の場合には少年法の規定によって適切に措置されること。

2) 客観的な社会倫理において：

「生命を『物』としか見ようとしない荒廃した風潮」など。

3) 本人自身の主観的な意識において：

継母は実の子である妹と違い、僕に対しては、「朝から晩まで」怒っていた。「僕は不満を自分からとってしまう仕事で一生懸命だった」(9.26)。

こうした問いかけ、受けとめを原稿では重層的な形で内容構成し、そのうえで藤田はみずからの想念を示している。法的制裁が問われる行為事実は否認できないとして、社会倫理上の批判も、それとして受けなければならないとして、そして、当の少年自身も、措置されて入校している理由を受けとめているにしても、藤田は当の少年の側の認識（環境と自己自身についての少年自身による認識）に即して次の問いを根本的に重んじている。すなわち、内心の格律（良心と悔悟）にかかわる道徳な判断が可能であり、なにほどこその質的水準が認められる場合に、どのように罪過を問えるか。こうした想念である。この問いは、—「誰れが悪いのでもない」という言明を北海道家庭学校の具体的内容文脈にかかわる所見として重視すれば—次の2つに



区分できる。

i) 特定の誰かに限定して、罪過を問うことができるか。截然と対象人物を確定することは困難ではないか。

ii) なぜ苦難か。

罪過の行為事実があって、それに対する関係機関の判断を経て教護院入所と措置されること、そうした法制度的対応（因果の関係づけ）はやむをえない。しかし、そうであるにしても、罪過の行為発生前に、なぜ不当ともいえる苦しみ境遇でなければならないのか。「次郎物語」の次郎の不遇に対し少年が深い共感を示す、原稿で引用されている少年自身による日記は、藤田の日誌（整理番号89）のなかで添付（資料5）されるとともに、日誌本文でも引用され特記されている。『『小さい時から苦勞をしたり我慢をしたりした次郎の様に僕もそういう生き方をやってみたいと思いました』少ししか読まない本を他の子から応援してもらったり、教えてもらったりして書いた感想文が多い中で、次郎の生き方の中に自分の生き方を二重映しにさせながら読み切っている\*\*（89）の感想文は、群を抜いた迫力で身につまされるものがある」（下線は、原文ママ。下線部は朱筆。1.21、資料6）と藤田は記している。

2つの問い i)、ii) を含む道徳的判断は、いかにして成り立っているだろうか。この点で、藤田に、寮長という以外に何か職務上の特権の権限が与えられたわけではない。少年の生が経験した過去に、藤田は、正面からむき合い、錯綜する筋道を丁寧に辿りながら、生きられた過去を再構成し、少年の現在を理解していた。道徳的判断にかかわる想念はこうした作業で成り立っている。遠方の近親者への訪問や、来校する家族等近親者との面会、書簡を通じてのやりとり、そして、石上館の寮生全員にむけて題目設定された日記－「生んでくれた母と育ててくれた母」（日誌、整理番号89,1981.12.22）といった題目は、当の少年のことを念頭に設定されていた－を通じての少年理解、これらは、その具体的手立てである。いずれも、少年とその境遇を理解する基本的方法として不可欠であった。その方法の根底には、少年の生に内面的にむきあうことによる、その生に対する歴史への問いかけをともなう。目に見える行動に視野を限定して行動改善を図る、という様式が当時あったとしても、藤田の流儀はそれと異なっている。

歴史と現在への問いかけをともなう上記の対象人物と苦難の問い i)、ii)、とともに、道徳的な意味でどのように罪過を問うことができるか、という想念が成り立っている。

この点についてさらに掘り下げよう。この主題は、苦難な状態でありながらも、どう「長所」といえる人格的資質や能力を具体的に示し、発揮することができるか、そして人為的にどう促すことができるか、というみずからの責務と受けとめる将来にむけた実践的関心と不可分である。日誌（整理番号89）本体には、さきに a) として分類した事例が克明に記述されている。その事例は、藤田が日々の実践において、出会うことができた少年の姿である。「寮長二十年のくぎりに」（1983）で藤田は、北海道家庭学校創設者留岡幸助（1864-1934、元治元-昭和9）「感化の真諦」（大正4）を引用している。「人にはそれぞれ個性があって、それには必ず引っ掛かりというものがある。此の引っ掛かりをさい発見することが出来たならば、よし其の人が墮落に深淵に沈んで居ても必ず之を引き上げることが出来る」という部分を引用して、藤田は次のように記していた。「この真諦は六十年たった今も凛として私ども指針となっています。この少年にどんな長所があるのか、この個性のどこを褒めて行ったらいいか、このことは取り立ててべたべたとその少年をほめそやして行くのではなく、自分の最も得意としているものを大人が認めてくれたという誇りを身体の内から湧き出させる自然のものにしていく地道な鼓

舞が大切だと思うのです」(拙稿、実践記録一覧、参照)。当の日記には、ここにいう「長所」「個性」といってよい人格的側面を掘り起こすように記述されている。それらを褒めること、賞賛は尊ばれている。しかし、安売りはしない。「地道な鼓舞」こそ、重んじるものだ。そうした見定めとともに、感情の表出、とりわけ「笑い」「微笑」は、日常生活のなかで見逃すことはできない。ある日(9.25)の「サイロの中での草ふみ」の場面(資料2)など、ゆたかな自然のなかの作業班活動の場で見出される少年の姿は、藤田にとっても喜びである。当の少年が示す生の「深淵」からー自棄にならずー自己の生の活動を内側から「引き上げる」生きる力として、藤田は見出し、価値づけている。

「笑い」や「ユーモア」を感受し、共に感ずるその姿勢は、藤田の際立った資質であり、卓越した能力の所産である。家庭学校着任当初から一貫している。その点は、谷昌恒(1922-2000、大正11-平成12、校長在職期間1969-1997、昭和44-平成9)と対比できるだろう。校長として藤田とほぼ同時期に着任し、講話等を通じて、全体的理念の提示という点で卓越したー留岡幸助と類比できるほどにー指導的役割を發揮した谷の役割と対比するとき、藤田のこの種の共感能力は、寮生活を通じて寮母セツ子夫人(1957-、昭和32-)とともに、至近距離で寄り添った藤田の可能性と資質を特徴づける。そうした姿勢ーこの点は別稿を用意する必要があるーが日々示されている日記と対比すれば、「誰れが悪いのでもない」と名づけられた原稿は、この側面を強調するよりも、むしろそれを抑制している。そうしてまでも、どう道徳的にどのように罪過を問うことができるか、という点を藤田はこの原稿全体の具体的記述を通じて、際立たせている(資料7)。そしてなぜ不当といえる苦しみの中に生きなければならないのか、と問いかけている。この点が原稿の主題設定を特徴づけている。

### 3 教育の実践課題 ー生に対してどう配慮するかー

こうした主題設定の原稿内容はどのような意義を示していただろうか。藤田が自覚していたかどうか、執筆意図にあったかどうかは切り離して、考察しよう。次の2点について、検討したい。第一に、その位置づけについて。当の少年の場合を越え、家庭学校の少年たちに切実感をもって共通する主題であろう、という点。第二に、その主題を正面に受けとめる藤田の実践について。その実践は「教育」であるか、という点。この2点の検討のために、留岡幸助の所論に着目しよう。

第一について。幸助が北海道家庭学校を創設したのは1914(大正3)年であるが、それ以前に、「人生は試練なり」を1897(明治30)年『基督教新聞』に発表した(『留岡幸助著作集』第1巻、同朋舎、1979)。「人或は難じて日はん神は父にして吾人人類を子として愛するものならば何故に人世に不遇軼軻のこと多やと。…卑見に扼れば人に軼軻のこと多く、世に厄難の絶へざるは人類を成玉せん為なり、…人類を成玉せんには刺激物なくんばある可らず、この刺激物を名けて試練(テスト)とは云ふなり、…人類を精神的に教育せんにはまたこの試練なくんばある可らず、人生不遇のこと多く、軼軻の時あるは即ち之が為而已」(同上、p.252)。「軼軻」とは思うように進まないことである。「不遇軼軻」、「厄難」は、人に苦難を与える。それ排斥せず、受け入れる。「艱難にも尚ほ歓喜を為す」(同上、p.253)とは、北海道家庭学校の礼拝堂の正面に扁額された「難有」の理念であった。ただし、なにによって生み出された「艱難」か。みずからの罪過によるか、それとも、いわれなき「艱難」なのか。その点は上記所論では不明である。

いずれにせよ、所与の「艱難」そのものが積極的に意義づけられている。その意義づけは、幸助が独自におこなったのではない。幸助は「神よ汝は我等を試みて白銀をねるごとくに我等を練たまいたればなり（詩篇六十六章十節）」と旧約の章句を引いて根拠づけていた（同上、p.253）。理念を掲示する、幸助のこの旧約引用は貴重である。旧約世界の成立を「教育」の視点を含め社会史的に実証しているマックス・ヴェーバー（1864-1920）『古代ユダヤ教』（1917-19）の旧約理解－「悲惨の炉」を通じての試練、とりわけ「罪なき苦難」を通じての試練が人間形成の観点から意義づけられていること－を参照するならば、留岡が掲示する理念は歴史社会学的基礎で支えられていることがわかる。同時に、藤田が設定した「誰れが悪いのでもない」という主題も、北海道家庭学校成立史を越えて、普遍的視野で根拠づけられることを、われわれは認識できる。藤田は自覚しなかったかも知れないが、重い歴史を引き継ぐ主題であった。そのような意義を有した、一人一人の少年にとって、切実感のある主題を原稿は示していた。

第二について。こうした主題は、艱難を所与の状態として受容することを根拠づけるが、同時に、実践的にも重要である。「人生は試練なり」という留岡の所見によれば、試練に導く、そのような性質の「教育」－ある種の「教育」－に直結するからである。この所見に着目するとともに、自覚的な受けとめを重んじた意図的な人間形成に含まれる点で、藤田の実践も、基本的には「教育」に属する実践であった、といてよい。その点でただちに補足を要するのは、157枚の原稿にも、3冊の日誌（整理番号89）にも、みずからの実践を基本的に特徴づけるものとして、藤田は「教育」という言葉を使用してはいない、という事情である。報告、著作、論説は別として、日誌に限定しては、つねに藤田の記述態度は、少年たちに対し、みずからが見聞した具体的事実、徹底的に即している（実践記録一覧、参照）。その態度からすると、「教育」という言葉さえ、抽象的であった。この事情はどう受けとめるべきか。2点指摘しよう。

その1。「教育」という言葉が使用されずとも、実質的な内容において、教育の実践といえること。萩原葉子の作品主題に深く基本的に共感するにしても、特定の個人に対する持続的な働きかけを示しているにせよ、細部ではその主題とかならずしも過不足なく一致するものではなかった。実践者としての固有性に着目した場合、姉としての萩原葉子が妹に示した働きかけ（「世話」の実践）の部分を含みながらも、それには重ならない領域部分が持続的に展開している。原稿には、少年に対する藤田の実践が基本的に人間形成を目指している点が顕著にうかがえる。「可能性」（12.5）を期待し、「非凡の器に自分でどう対応すべきか」考えて（12.18）、漱石の「こころ」について語り合える日を楽しみにする（1.21）などの記述が着目できる。日誌には、「\*\*（89）をもっともっと笑わせること！ \*\*（89）をもっともっと怒らせること！ ～～～この2つが表裏一体として皆との暮らしの中に出てくる様になれば、\*\*（89）は次の少年期に入ることになる！」（10.15）と記されていた。ここにも、当の少年に対する基本的信頼感とともに、人間形成にむけた期待感と、方法的自覚に支えられた予想とが表れている。

その2。「教育」実践であると認める場合、生徒指導記録簿など教務書類が提供する整理の諸形式に、藤田の記述態度は依存していない。行動および性格の記録として「基本的生活習慣」「自主性」「責任感」「根気強さ」「自省心」「向上心」「指導性」「協調性」「同情心」「公共心」「積極性」「情緒の安定」などの項目について各年度A、B、C、D評価する様式などには、必要に応じ便宜的にのみ準拠するにとどまる。むしろ、人間形成に関する無記名ともいえる経験領域のなかで、何に配慮することが可能か、当の少年がその時々を示す生の活動の様態－「寡黙」、「特有の無表情」、「毅然たる一面」、「淡々とした表情」、「微笑」、「誇り高く生きている」等々

の心の姿（いずれも日誌より）ーにむきあいながら、何に配慮することが根本的に重要か、という問いを課題として積極的に切り拓いている。心の理解を含めた、生に対する配慮が、そのつと問われている。それに関するその展望は、事実的根拠をともなっている。架空の想定ではない。藤田が実践を通じて示した「教育」は、家庭学校の伝統、すなわち「家庭」（無条件的な存在承認）を基盤にして、「学業」・「作業」とともに、季節おりおりの諸行事の場面での日々の「努力」と、その成果（「収穫」）発表、全体のなかの賞賛と名誉感の体系（「努力賞」・「学業賞」・「作業賞」といった三賞など）にも規定されつつ、独自の位相を有するにちがいない。藤田による意図的な人間形成の働きは、苦難を受けとめること、そしてユーモアを受けとめ共感することを根底的な不可欠な要件（契機）とし、全体としてどのような構成契機をもっているか。実践主体としての姿勢に即せば、教育の課題領域として、一連の生の諸活動とその様態のうち何に配慮することが可能で、重要なのか、という根本的次元での問いかけである。

退職後に執筆した長文の未発表原稿「誰れが悪いのでもない」は、以上の検討が示すように、不当な苦難にかかわる主題そのものの認識とともに、生の活動様態にむきあい何に配慮することが可能か、という問いに応答することを今も促している。その問いは、施設内で、分校、分教室の形態で、学校教育法が規定する小学校教育、中学校教育をどう実施し保障するか、という制度的問題ー藤田在職中も、その課題は共有されていたーと対比すれば、異なった位相を示しているだろう。藤田の未発表原稿が示している問いをより明確にすることは、教育学研究の課題であり、悲惨な少年事件が発生せずとも、学校、家庭、地域社会などを含む教育現場の実践的な課題であり続けている。意図的な人間形成を教育というその操作的概念規定を堅持しつつも、その限定（前提）のもとで、どのような豊かさを含むか、その点の見定めが求められるだろう。実践記録一覧のなかでは「その他」に区分せざるをえない、この未発表原稿は、藤田自身の主要な想念の一部を含むとともに、藤田の自覚を超えた重い普遍史意義を、われわれに根本的次元で示している。

資料1

原稿書き出し部分。入校した少年のことを父との関連で語りたいと記す。原稿には、父のほか、父の弟(叔父)、継母、実母、実母の兄(叔母)、などが登場する。



資料2

この日（9月25日）、作業班活動のなかで、少年の表情に「微笑」を見出している。

見つめているのだ。

「この頃、みんな興しいというのを知らないが、飢えていた人達の様な行動をすると思う。」

「この点僕は自慢がないけど、母親がちゃんと教えてくれた事を守って、変な行動はしない。母には感謝しなくてはいけません。」

母に感謝しているという言葉を初めて聞いた。

\*\* (89) ✓

9.25 午後から酪農部のサイレー王冠接に行ってきた。長いホークでの草積み。草をいっばい積んだトラクターに乗って大さく揺れながらの往復。サイロの中で草積み、そのたびにたびに歓声をあげて遊んでいた筈の中で、\*\* (89) の静かな笑いはたしかに異質だった。

暗く沈んでいるという訳ではないのだが、小さく筈の小さなけ合には眼をやるたびに\*\* (89) の微笑……には、なんだか俗っぽいな事をさっぱりと拒否する司祭の様な別の微笑があった様な気がしている。

9.26 今日の日記。

「僕は何故ここに来たのかは先生は知っているはずです。」

「いっも不満は親だけにぶっつけ。友達とは仲が良かった。つまり=重人格者というわけである。」

## 資料3

10月14日、15日スポーツや仲間との暮らしの中にも、「笑い」を見出しほつとするとともに、よりいっそう実現させることが、この少年の成長につながると、方法的に自覚する。

どの種目でも背筋をまっさら伸ばし、にこりともいな  
顔には古武士の矜持の様なもろさを感じさせたこ  
もの今日のチャレにぶつかった。 たったひとつ、け  
ん太の2回には流石の\*\* (89) も照れ隠しの様  
ににこり笑い、こり笑い、なんとも言えない肉体的な  
ペーソスがあつてほつとしたのだ。

① 来信 3通 男女同級生より

② 来信 1番 尊敬している

日野 \* \* 先生へ。

10.15

① 誕生会 ( \*\* (88) と \*\* (91) )

ほとんども笑わない \*\* (89) が、柏葉祭の時だけにと  
白歯を見せろ微笑したのが嬉しかった。

\*\* (89) をもつともつと笑わせること / \*\* (89) をもつとも  
つ怒らせること / ~~~~~ この2つが表裏一体として  
皆の幕しの中に出る様にならば、\*\* (89) は次の  
少年期に入ることになる。 /

② 来信 同級生より。

10.16

① 部屋替之実施  
(僕の一方的指示で)

1号室 \*\* (87) \*\* (81) \*\* (64) \*\* (78)

2号室 \*\* (86) \*\* (91) \*\* (88) \*\* (89)

3号室 \*\* (84) \*\* (90) \*\* (85) \*\* (70)

和室 \*\* (82)

## 資料4

8月23日の記述。少年自身の日記に、なにが記されているか、とともに、どのように表現で記されているか、という点も藤田は見逃さない。少年の自己表現にかかわる一証跡を語勢のうちに藤田は確認し、好ましく受けとめている。

8.22 今日学校の大掃除をする。の全国校長会議にまぎえりの学校の外の清掃が今日も続いたのだが、\*\*(89)の真面目な仕事振りが今日も地味に先っていた。

「朝2つ方に、笠間栢荷神社と書いてあるお宇りに手を合わせました。」

首に下げているお宇り、何かいたいたい気がするのは何故だろうか？

8.23 ①朗読会 **\*\* (80) 出場。**

皆なが揃っての初めての礼拝堂での礼拝だった。  
\*\*(89)がどんな顔で産り続けたか知る由もないが、日記が厳しく胸をうつ。

「僕だって、あの7人以上は、学び、全体的に成長し、短い期間で、家庭学校を卒業し、立派な学生、又は社会人になり、回りの人々にはおおいくな事をしないで、自分の回りで、おおいくな行動をしているような人には、その人のために道人<sup>ミチト</sup>に注意してあげたいです。」

特に、僕<sup>ミチト</sup>だ、語勢が印象的だ。

8.24 ①大きなダンボール送らホて来る。

まだ中味は見えていないのだが、今日1日なんともくぼつんと人遊びしていた\*\*(89)が、そればかり嬉しそうに、にこにこしながら突如2人でダンボールを事務所から運んで来た顔の明かるとったのが嬉しかった。

(冬物の衣類、今迄使っていた学用品等)







## 資料6

1月21日の記述。主人公次郎の生き方に対する少年の共感に、藤田は少年の深い内面を発見している。

と皆を怒鳴りつけたら、\*\* (89) 以外の11人が全部立って僕もいそぎが参ったのだが、\*\* (89) のスケールの大ささ良心的な日記にはうむと思つておた

「僕は『螢雪の功』の様に苦勞して學問を立派に成功させて『大器晩成』のやう様な事をし、立身出世してみようと思つてます。」

1.21 午後から職員会となり、寮に残った皆には、今迄読んだ本からの讀書感想文を書かせてもらう。

### ○ 次郎物語

「小さい時から苦勞をしたり我慢をしたりした次郎の様に僕もまうやうな生き方をやってみたいと思つてました。」

少ししか読まない本を他の子から応接してもらったり、教えてもらったりして書いた感想文が多い中で、次郎の生き方の中に自分の生き方を二重映しにさせながら読み切っている\*\* (89) の感想文は、群を抜いた迫力で身につまされるものがある。

1.22 \*\* (70)、\*\* (82) と風邪をひき、他の子も何人が風邪気味だ。\*\* (89) の頑健さが程もしく目立つ。ただ奇になるのは、\*\* (89) の顔がうす々なくなつて

### ○ 顔の湿疹。

葉をつけているし、大事にしているのだが、入校当時からのものが極端に赤くなる証で、なまじ治る証でもなくあるのが腹立たしい。

## 資料7

最後の段落は、藤田が付加した部分である。どう罪過を問うことができるか、という主題が少年のなかで持続的であることを、藤田はこうした付加によって示そうとしたのだろうか。

自分がソロバノを壊したと白状して次郎によ  
 やりました。次郎はこの事を秘密にして最  
 後まで兄弟の罪をかぶりしました。  
 僕は二の次郎の根性が好きです。このあこ  
 しばらくして次郎は母を失ないました。お葬  
 式の時にお葬も来り何年振りかの再会をし  
 ました。それからの次郎はまるっきり性格が変  
 り、本当にすごい成長をしたなと思ひました。  
 僕は二の次郎の苦労したところ、この後  
 の成長した姿がこれも好きです。小さい時  
 らう苦労したり我慢したりした次郎の様に僕  
 もこういう生き方をやってみたいと思ひます。  
 次郎物語は第五部が未完のまま下村湖人  
 という人は元くなりましたが、この後の第六  
 部、第七部と読みたかった気もするし、第五  
 部が未完のまま終ったいるからこの後の次  
 郎の姿を想像できるからいいという気もして  
 今でもこのことを時々考へています。  
 去年の七月に読んで、次郎物語の感想を

## 本文

## 誰れが悪いのでもない

-ある父子の一九六〇年から一九九四年二月までの日々-

藤田俊二

一九七八年八月、全く管轄外の仙台市児童相談所より入校した平川幸策君とお父さんのことを語らなければいけないと思いたつものがあって、僕が書き続けていた記録を検証しながら静かにペンをとり始めている。

本来なら北海道の三つの教護院は北海道の少年少女しか入院入校させることは出来ず、仙台市の少年は宮城県の教護院に入るのが普通なのだが、平川君の犯した過ちは十四才未満であるが故に少年法の適用外となったものの閑静な住宅街での全く無抵抗な五才の幼児に対する理由なき暴力で瀕死の重傷を負わせたという通り魔的犯行への恐怖の故に、地元の不安を取り鎮める為の仙台家庭裁判所からの特別の依頼を受けて、仙台児童相談所を経ての異例の入校となったのである。

## 十四才未満少年犯罪の法的手続き

十四才未満少年の犯罪については（刑法四十一条、十四歳に満たない者は罰しない）の規定により、刑事責任は問われないため、逮捕状の執行もなく、警察から直接児童相談所に送られる。通常十四才未満の場合、児童相談所は一時保護のかたちをとるが、相談所の監視下かもしくは自宅に帰したら不測の事態が予想される場合に限り、家庭裁判所の許可を得て、観護措置、つまり十四才以上と規定されている少年鑑別所に強制的に収容することが出来る。鑑別所では二十八日間の期限以内に、収容した少年の性格、能力、家庭環境、学校と地域の環境などを調査し、その結果を児童相談所に通知する。その調査結果により、児童相談所は教護院収容や注意観察、保護観察、等の処分を決める。この処分に親が同意しない場合や、無実もしくは非行内容がいちぢるしく悪く判断がつかない場合は、児童相談所は家庭裁判所に送致して、家庭裁判所が少年の処分を審判の上決定する。

十四才未満の少年の審判事件は非常に少なく、仙台家庭裁判所で扱う年間七百件を超す少年犯罪の中で十四才未満の審判事件は、五件程度しかない。家庭裁判所の審判は、家庭裁判所調査官の調査を受けながら進められ、少年には親や弁護士など付添をつける。（少年法十条）家庭裁判所裁判官は十四才未満の少年に対しては、（１）教護院送致、（２）保護観察、（３）不処分（無罪）などの決定を下す。

平川君の入校については、家庭裁判所に送致された二、三日後に内々の打診があり、この事件の特異性から入校を受け入れるべきかどうか校内で様々な角度から検討の末に入校受け入れを決定した経緯があり、担当することになった僕はかなりの緊張感を持って平川君の入校を待った。

殺人未遂又はもしかしたら傷害致死事件ともなれば、十四才以上であれば即特別少年院入りか精神鑑定を経ての特別医療少年院に入院する大変な事件だったが、十三才八ヶ月だった故に平川幸策は家庭学校へ入校となったのである。幸いにして被害者の林太郎ちゃんは恐怖の高熱にうなされながらも一命を取りとめた。そして林太郎ちゃんが助かったことを最終確認してほっと安堵しながら、平川君の入校を待つと共に、仙台少年鑑別所の鑑別記録、仙台家庭裁判所の調査記録、仙台市児童相談所の児童記録、心理テスト等々の記録をすべて詳細に読みつくすと共に、僕は仙台の友人にお願いして仙台地元の「河北新報」と全国紙五紙とその市内版の事件当日から現在までの分全部を送ってもらって刻（ママ）明に読み続けた。

## 河北新報

七月二日 一面トップ

社会面六段抜き

見出し

大都市のひずみ 豊かさの中、心は荒廃

異常行動生む現実感喪失

市内版五段抜き

見出し

戦慄ー日曜の住宅街 防犯上の死角

県警パトロール強化 要所要所に警官と共に自治会役員警備につく

七月三日

社説

見出し

都市の死角が生む通り魔事件

連帯感をとりもどせ

ー結論ー

今回の被害者が幼ない子供だったことを考えると、この通り魔のような凶行が社会の一番弱い者に向けられたという事実は、その背景には、生命を「物」としか見ようとしない荒廃した風潮があると断ぜざるを得ない。特効薬はないにしろ、社会や精神のひずみなど、荒廃を生む土壌を改善する道を徹底的に追求することを提言したい。

七月四日

夕刊トップ

見出し

犯人は一見中学生ふう 不審者の似顔絵公開、町内会に「安全対策を考える会」が組織される

七月五日

市内版

見出し

住宅街に防犯テレビカメラ設置

被害者林太郎ちゃん証言「中学生のようだった」

「読者の声」欄

住宅街は自衛に立て 二十二才 学生

犯人は保安処分にせよ それが人名尊重の道 五十六才 公務員

七月六日

市内版

見出し

被害者林太郎ちゃんの状況聴取とりやめ

依然として高熱続く

七月七日

社会面トップ 五段抜き

中二少年取り調べ 不審者目撃情報にそっくり

七月八日

社会面トップ 六段抜き

見出し

中二少年犯行を自供 家庭複雑 気持がむしゃくしゃしてやった 特別捜査本部、仙台児童相談所に通告 仙台児童相談所は即日仙台家庭裁判所に送致

自供のことは

－親は厳しく、家の中はいつも冷めたかった、いつも気がむしゃくしゃしていて誰でも殴りつけたい気持ちで暮らしていた しかし、林太郎というあの男の子にとっても悪いことをしたと思っている－

記事

－家庭は中流の上、父母とも大学卒、父は大会社の社員で四十才、実母は少年が五才の時に離婚、実父は現在肝硬変で入院したばかりである

見出し

普通の少年 孤独な暴発 あえぐ病む心

生きる目標なく苦悩 弱い者にぶつけた不満といらだち

県内版トップ

県警記者会見

見出し

「少年にも将来があるので…」と歯切れの悪い幕切れ

内容

「本当は胸を張ってくわしく話したいんですよ。刑事が一生懸命やってようやく犯人にたどりついたのですから…。しかし、この少年の将来を考えると何んにも言いえないのです。…この辺で勘弁して下さい。」

見出し

再婚の継母に反抗

内容

ー実父は入院中でもあり、この日も警察にも児童相談所にも全く姿を見せなかった。

七月九日

夕刊 全面

見出し

中学校の教師混乱

内容

「どうしてこんな事件がおきたのか全くわからない。」

「普段おとなしくて全く目立たなかったし、何が何だかわからない。」

校長、朝会で訴え

「人に思いやりを持とう、生命がどんなに大切かを日常生活の中で考えて行こう。

お互いをよく知り、助け合う美しい心を持ち続けてほしい」

訴えを聞いた同級生女子

「犯人の生徒が可哀想です」と犯人の少年の家庭環境の暗さに同情して泣く

七月十日

社説

「このような事件が再びあってはならない。学校と地域はこと細かに連絡を取り合いながら、一人一人の教育に当たるべきである。」

連載 緊急レポート

「普通の少年の衝撃」

七月十日

(1)

父親の会社は東京に本社をおく大企業

七月十一日

(2)

少年の心をつかめずー。中学校では明るい少年と判断していた。



七月十二日

(3) 心のカルテ、父親に似るひ弱さ

七月十一日

特集 「読者の声」

「-生徒を全く知らぬ先生-

教師が子供の家庭を訪問し、親と先生と子供が心の通い合う家庭訪問を何回もしていたら、この少年の心の奥の悩みや苦しみをいくらかは分かって行く筈だし、変わった行動や素行の変化などにも疑問が出て来て事前に何かの手助けは出来た筈。

五十二才 会社員」

「-少年の暴発、母にも責任-

もし両親がいっしょにいればと思わずにはいられません。少年が人の見ている前でも何でも激しく怒られながら道の掃除をしたり、共同のゴミ捨て場のゴミ捨てなどをさせられていたという新聞記事を読んで、私は思わず涙が出てしまいました。

昔のことわざに、その子の運命をきめるのは母親であると言われていました。その犯人の少年は、今年になってから母親に一度か二度反抗して殴りかかったという事ですが、このおとなしい少年がそんなことをするのはよくよくのことだと思いますから、この母親はこの少年にあまりやさしくしていなかったのではないのでしょうか。いくら血のつながりはないとはいえ一応自分の子供ではありませんか。どうしてもっと愛情を持って接することが出来なかったのでしょうか。いろんな事件、感情はあると思いますが、子供には何の罪もないのです。

中三 女子」

「-父親はどうしていたのか-

今度の事件で気になるのは父親は何を考え、何をしていたのかということです。父親は大きな一流会社の社員、とすれば仙台では一種のエリート、体を悪くして入院中とのことですが、まだ児童相談所にも、家庭裁判所にも行っていないのは仕方ないとしても、今度の自分の息子の起した事件について、医師を通してでもきちんと詫びるべきなのに一切そういうことを発言していないのは無責任だと思います。おそらくこの父親は、どうして息子がこのような事件を起こすようになったか原因を、一番知っていると思います。

三十才 主婦」

僕は「河北新聞」を隅から隅まで読みつくした後、全国紙五紙にもすべて目を通した。

特に、各マスコミが最後まで秘した「事件の犯人の少年の父親は、K新聞社社員」に深くこだわりながら、K紙は七月いっぱい注意深く読み続けた。

K紙

七月二日 社会面トップ

六段

見出し

仙台の宵の住宅街で通り魔 幼児が刺されて重体

七月三日 県内版トップ

七段抜き

見出し

安心して遊べない 怒りと恐怖の親や住民

七月四日

県内版四段

見出し

犯人は中学生風

七月五日

記事なし

七月六日

記事なし

七月七日

県内版三段

見出し

やはり中学生だったか驚く住宅街の親たち 事件解決に住民安堵

全国版は記事なし

七月八日

県内版四段

見出し

普通の家庭の子

内容

犯人の少年は両親と妹の四人暮らし、ごく普通の家庭である。非行歴は全くなく、中学校ではいつもおとなしく、しかし、どこかにかげりがあったという。

全国版 社会面下の一段に七行

仙台の通り魔事件解決

K新聞社は七月五日の時点で、今度の事件の犯人が自社の社員の子供であることを知り、おそらくは社内ではいろいろな検討を重ねながら記事にして行ったであろうことは、その苦渋の紙面からも切なく伝わってくる。

七月八日以後、K紙の紙面にはこの事件は一切のらなくなったし、気の故か教育問題についての発言が少し声低くなった様な気はする。

しかし、僕はK社の対応について批判する為にこのペンをとったのではないし、むしろK社も大変だったろうなと思ひながら、平川君の入校から中学への復学、高校への進学、両親の離婚、父さんの病気という平川君と平川君の家族の重い軌道の一つ一つたどりながら、事実の重味にたじろぎながら。大袈裟に言えば一九六〇年から一九九四年を生きた、生きている、父と子の人生を誌す為にこのペンをとった。

因みに、「誰れが悪いのでもない」という題は、萩原葉子氏が「葦草の家」に続いて書いた「誰れが悪いのでもない」という本の題名を許しなくお借りした。

天才詩人萩原朔太郎の尋常ではない家族のひとりひとりの生きざまと暗い暗い家庭の犠牲となった人たちのことを淡々と、しかし、辛く書き残しているこの本に涙しながらお借りした。

八月六日 快晴

浅黒い顔に緊張をただよわせながら入校、

どうだ、腹へったべ！？

ハイ…少し…（少しはにかみながら）

仙台から遠軽は遠かったろう

ハイ

鑑別所には何日居た？

二十九日間だと思います

父さんの病気はどう？

病院にいるのでよく分かりません

父さんとはいつもどんな話をする？

全然話はしません（きっぱりとした口調）

母さんとは？

別に…話しません（暗い暗い顔になる）

母さんは違う母さんだよ

ハイ（きっぱりとした口調）

ほんとの母さんの顔は知っているの？

知りません（全く無表情）

ほんとの母さんとは会いたいと思う？

さあ…（弱々しい曖昧な表情）

勉強は好き？

あまり好きではないです

スポーツは？

長距離と走り高跳びです

走り高跳びはどれ位跳ぶの？

一米七〇ぐらいです

それは大したもんだ、まこれから仲良く暮そうなー

ハイ（ようやく少し笑顔を見せる）

寮に居た五人に平川を紹介すると共に、皆で10分ばかり雑談。

「仙台から来た平川君だ、よろしくな」

「仙台からまで家庭学校に来るなんてすごいな」と羽田が素っ頓狂な声で笑い、平川もつられて笑い、

「平川もほんとの両親は離婚しているけど、皆もそうだな」

とさりげなく声をかけたら、羽田も花輪も野村も清水も安田も苦笑しながら頭をかき、自分の故ではないのに頭をかいている一人一人の優しさのようなものに、じんとしていた。

「こうして一緒に暮すことになったのも一つの縁だ、家庭学校に来た今の気持ちを記念に書いたら書いておくといいよ」

と言ったら、少し躊躇した後、思い切った様に十分ばかり瞑目してから一気に次の作文を書い

た。

「中学三年になる前にどうしてもここから出てやる。それまでに、愛情というものを心の中に作る。そして更に三つ、優しさ、人情、広い心も作ってやる。 終り、

平川 幸策」

烈しい気性の子だろうなと予想していたが、言葉や態度は淡々と静かだった。しかし、この短い文に漲っている烈しさはやはり並みではないと僕もいささか緊張している。

八月十日 晴れ

日記

「僕の親は成績が良かった。父は大学の入学試験の成績は、四百人中十七番という良い順位だった。母は大学の時の成績は分からないが、小学校の成績は分る。小学生六年生の時は組五十五人中十二番で、十番以上の成績を取りたかったそうだが駄目だったという。

父の学生時代は大変だった。何故かとういふと父の父はお金を出してくれなかったからである。だから僕の父は自分で自分の学資をアルバイトをしてかせいだという。

母は金持ちの家に生れたのでそんな苦労は知らなかったらしい。父は、僕が生れてしばらくしてから今の母と結婚した事は、僕は幼稚園の時から分かっていた。それから今まで父と母は僕の世話をしてくれた。怒ったり、ほめたりだったが、大体怒られることが多かった。

父は酒を飲まなければ本当に良い父だが、今まであまり酒を飲み続けたので、体を悪くして今は入院している。そういうことでもう酒は飲まないと言っているので安心していいだろうと思うが、父は禁酒をすると言っはいつも破って、僕が知っているだけでも数え切れない位でまだまだ油断は出来ない。

母はよく気がつくし、よく喋るので父はいつも文句を言っている。僕も母の気がきき過ぎるのは嫌だが、言っていることはいつも大体正しいし、僕の事を心配して言ってくれている所もあると僕は思っている。

こういう親に対して僕は反抗ばかりして来たので、最後は北海道の端っこであるこんな所に入ってしまったのである。だから僕は反省しているのである。」

考えさせられる平川の作文である。曖昧な言葉や、とってつけた様な軽佻な反省の言葉などがなくて、言いたいことをずばり文に書いている所があつて、これからの平川の日記を通してのコミュニケーションが大切な手がかりとしてじっと腕組みしている。

八月十三日～八月十四日

今日は夏帰省出来なかつた残留生徒二十三名と全職員でサロマ湖へキャンプに行つて来る。サロマ湖はもうクラゲが出始める直前の夏の終りの気配、最後の海水浴とキャンプを楽しむ大勢の人で三里浜は大賑わいだつた。

この夏まだ一度も泳いでいない平川は時々につこり笑いながら、皆と無邪気に潜つては貝を捕り、又潜つてはウニを捕つてはサロマの最後の夏を心から楽しんでた。

ちょっぴり不満そうだつたのは、見事に紺碧に映えているすぐそばのオホーツク海で泳げな

いこと、「どうして泳げないのかな？」と羽田にたずねたら「馬鹿だなお前、オホーツク海は温度がうんと低いから、二、三分も泳いだら体が動かなくなって沈んでしまうんだぞ！」とおどかさされて、「えっそうなの?!」と一瞬驚きながら、「じゃあ死にたいと思ったらオホーツクの海にとびこめばいいんだ」とにこりともしないで言い、羽田は目をばちばちさせてびっくりし、僕も思わず平川の顔を見返してしまった。

そして、夜サロマ湖の岸に大きなテントをはって全員で思い思いに寝たのだが、皆、浜辺の傾斜に従って頭はオホーツク海に足はサロマ湖側に投げ出して寝ていた中で、平川だけはその反対側で唯一人寝転がり、頭低足高のなんとも不自然で窮屈な恰好、仲々（ママ）寝つかれないのか眼をキラキラさせて明り窓から見える夜空に見入っている様子、「それでは仲々眠れないぞ、皆と同じ様に寝た方がいいよ」と声をかけたら、

「それでは北枕になりますから」

と丁寧に言い返して、そのままの恰好で朝までもじもじしながらもなんとか眠っていた。

僕はなんだかいろいろと気になって朝まで眼が冴えて眠れず。

八月十八日 くもり後雨

今日で夏の帰省が終わり、全員続々と帰って来た。そんな中で平川だけがぼつんと一人離れて「太陽にほえろ」に見入っている。ほんとに夢中になって見ているのではないことはその背中からよく分り、僕はなんとなくどう声をかけていいかきっかけがなくて黙っていた。平川には他人からの気易い言葉がけや冗談などをきっぱり拒否する様な孤高の精神が早やあり、十三才とは思われない見事な個性が早やある。

「今日、帰っていた皆が帰ってきた。皆が家に帰っている間、僕は残っている五人と暮していた。朝から晩までただ食べて、ただ寝て、平凡な生活だったと思う。ひまなので、親のことや、友だちのことや、仙台の町のことなどを頭の中でいろいろ考えていた。五人から十三人にふえた明日からは、今日までの一日一日とちがう生活がはじまるのではないだろうか。平凡が非凡になっていく日が待ち遠しい。

この十日は本当に早かったが、これが一ヶ月、一年となると僕も退屈するのではないだろうか。平凡な生活の中に楽しい事や悲しい事があるのだろうか。僕も人間のはしくれであるから、感情はやはりあるんだなと思ったりして暮らして行くのだろうか。

話は変って、僕もこのまま平凡に暮すと正月には仙台に帰省できるのだそうですね。だけどガードマンや警察の人が僕を見張ったりするのかな。家に帰っている間、僕はほんとに自由なんですか。

先生、正月までに教えて下さいね。」

僕はなんだかこみ上げてくるものがあって、平川を呼んでいろいろ話そうかと思ったがやめる。

八月十九日 雨

今日は「自分の夢」と題をして持って来た平川、黙って僕に手渡して足早やに帰って行った。

「自分の夢

僕は将来、一人暮らしの職人になりたい。

それは伝統工芸という仕事だ。伝統工芸の中で特にすみ絵や、私紙工芸などだ。

何故かという深い訳はないが、小学校五年生の時に伝統工芸の勉強をして、とてもひかれたからだ、それと僕の性格に合っているからだ。わいわい皆と暮すのは好きではないから、一人暮らしの職人になりたいのである。

夜寝てから見る夢は、広い砂漠や草原の真ん中にいたり、広い海の真ん中の無人島にいたり、広い海を漂流しながら星を見上げている夢が多い。その時は、僕は必ず一人の男で、三十才前後で、日本人だったり、アメリカ人だったり、イギリス人だったり、フランス人だったりするのです」。

なんとなく平川幸策という少年が見えて来て、いとおしく見えて来て、僕は明日から平川とは呼ばないで「幸策！」と名前だけで呼ぶことにしようと思う。

八月二十二日 晴れ時々くもり

今日は夏休みが終わって初めて全校全員揃っての礼拝と朗読会、幸策にとっては初めての出席だけに物珍しそうに皆の様子に見入り、七人の作文朗読をじっと聞いていた。

「僕だってあの七人以上に、学び、全体的に成長し、短い期間で家庭学校を卒業し、立派な学生又は社会人になり、周りの人に迷惑をかけないで暮します。」

「僕だって」という語勢に幸策の少年らしい覇気と意気込みを感じて、思わずにっこりする。表面は全くにこりともしないで端然としている幸策だが、心は他の少年と同じかそれ以上に少年らしい素直さに満ちている。

八月二十三日 晴れ

全国教護院長会議が初めて家庭学校で開かれての初日

寮の方は国立武蔵野学院附属教護職員養成所研修生で八月十二日から実習に入っている渋沢さんが皆とわいわい遊んだり、勉強をしたりしてくれているのだが、幸策の大人びた物腰と口調にいささか気押されるものがあったか、

「平川君はなんか僕より大人って感じで参りましたよ」。

としきりに頭をかきながら感心していた。

「今日は渋沢さんにいろいろ教えてもらいました。なんでも隠すことなく話してくれるし、本気で僕の話聞いてくれて嬉しかったです」。

八月二十六日 小雨後晴れ

「僕は有難いことは ①自分に優しくしてくれる人がいること ②回りの人がいろいろ気を遣って励ましてくれること ③自分の体力が全国平均より上であること ④今まで寛大な人に会えたこと。

嬉しいことは ①自分にいろんな感情があってそれを使えたこと ②生きてられること ③走り高跳びを一メートル五〇センチ飛び、走り幅跳びを三メートル九〇センチ跳んだこと」

このようなことを考えながら生きている少年と一緒に暮すのは初めての様な気がするし、何か宗教者の様な端正な雰囲気や漂わせている中学二年と暮すのも又初めての様な気がする夜である。

八月二十六日 晴れ

家内がしきりに考えこみながら、

「幸策君は私のことを嫌いらしいの。全然そばに来ようとしてもしないだけではなくて、私よりなるべく遠くの所に居ようとしているみたいなの。部屋に入って話しかけるととても硬い表情で丁寧に返事はしてくれるけれど、それだけなの、警戒している感じでもないし、敵意を持っている感じでもないけど、どこかで壁を作って打ち解けないのよねい。…」

「それは俺にだってそうだよ。対話とかお互いにベラベラ喋ってホンネを相手に分かってもらえるという間柄にはどうしてもなれそうもないから、彼の考えは毎日書いて見せにくる日記で知るしかないのだが、長い日記にしる短い日記にしる彼の書くものには通り一遍の（朝六時に起きておかずは卵でした）」という様な文は一つもなくて、実にいろいろ考えさせられて面白いんだよ。人の悪口や批判を書くのではなくて、自分の人生観とか人間観とかを実に正直にさらけ出してじんとするものがあるし、俺の方が実に勉強になるんだ。彼の日記だけではなくて他の十二人全部の日記もそうなんだけど、一字一句にこめられている意味の重さは大変なものだし、同じことばでも書く子によってその言葉にこめられている意味が違っているから日記と作文を読み続けるということは寮長冥利につきる仕事だよ。特に幸策の日記には深い含蓄があるから俺は何度も何度も咀嚼してから彼への対応と言葉がけを考えて行くんだよ。

つまらない悪さや、口論や浅い自己主張などは絶対にしないし、守るべきことはそれはもう100%これからも守って行くだろう。こんな真面目なタイプの少年は今時本当に珍しいだけに、表面だけ見て判断するのは早計だよ。」

家内はまだじっと考えこんでいるが、たしかに人間の根本的な憂うつのようなものを重く秘めている感じの幸策は家内にとってはとても重い負担感となっているのは事実、とに角、一三人全部が我が寮の生徒、そして幸策はその十三分の一人、十三人の賑わいの中で少しでも明るく明るくして行くのが僕たち夫婦の仕事である。

八月三十日 晴れ

今日は八月の誕生会、八月生まれの職員と生徒を全校で祝ってくれるのだが、僕は昨日で45



才、なんとなく私的な感慨でしみりしていただけに、幸策の日記にはまたまた考えこんでいる。

「僕の誕生祝いは、小さい頃に一度近所の友だちをよんでやってくれたので終りです。

だから僕の誕生祝は九才で終りなのです。

僕はなぜかわかりません。妹の誕生祝は毎年やっています。これからもずっとやるでしょう。これから我一家は、父、母、僕の誕生日が来ても誕生祝をすることはないでしょう。将来何か異変が起こらない限り、妹のほかは誕生祝をやることはないでしょう。」

これはどう解しているのか、どういう思いを込めて予言しているのか、いずれにしても異母妹だけを溺愛していると確信している実の父と継母への怨念のようなものが伝わってくることだけは確かで、沈思している。

そんな中で離婚と復縁を二度繰り返している野村の両親と、姿を隠していた花輪の母さんが何の連絡もなくひょっこり訪ねて来て、本人たちはどぎまぎしながら迎えている。

単純に喜んでいない戸惑いの気持が二人の表情にはあって、僕も挨拶の言葉に困った。幸策は自分の部屋に引きこもって本を読み続けている。

九月二日 小雨後晴れ

今日は一学期の成績発表と二学期の始業式、最新入生の幸策は物珍しそうに式次第に見入り、谷校長の一人一人の言葉をじっと聞いていた。

二学期から幸策は正式に学級は副島学級、実科は園芸部員となる。

「僕は今日から早い話がようやく一人前扱いになった様な気がしますが、僕の後に新入生が来ないうちはまだ新入生なのです。」

九月九日 くもり後小雨

今日から秋のソフトボール大会が始まり、我が寮は平和寮には17対12で勝ったものの桂林寮には0対11で完敗、十二人中試合に出れるのは九人、後半、幸策に「ライトで出てみろ」と声をかけたら、

「僕は結構です。」

と丁寧な断り、あとは頬杖をついてベンチの端に座って全く無表情で見ただけだった。試合の最中に坂田の父さん(継父)の訃報が入り、春からのガン再発でこの日のくることは予期していたのだが、実父もガンで死亡、継父もまたガンで亡くなるという坂田の父親運の悪さには天を仰ぐのみだった。

「僕もあまり幸せではないですけど、他の人たちもあまり幸せそうではなくて、ここはそういう人がやたらに多い気がします。」

今江祥智は最近出版された「優しさごっこ」の扉に冬子へと題して

「世間には、両親が別れたために不幸な子どもがたくさんいる。しかし、別れないために不幸な子どもも同じだけいるのだ

—エーリヒ・ケストラ—

と書いて、離婚以後の父と娘の日々を、周りの人の優しさに感謝しながらほのぼのと書いておられるが、母が去って行った以後にもこのような優しい人々が周りに沢山居て、何よりも父親がしっかりと優しく存在していれば離婚も又やむを得ないことかも知れないと思いつつ、それにしても我が寮の十三人、ほとんど離婚の子というのは辛い現実である。

両親離婚 羽田 野村 花輪 四谷 小林  
安田 清水 田中 平川

父 死亡 南 坂田

実父母仲よく健在 奥山

唯一父母仲良く健在の奥山、父は事業倒産の末に命からがら四国から逃げる様にやって来て今は釧路原野を従横に走り廻っているトラックの運転手、助手席には母さんが乗って時には大阪方面までも長距離をかける。

そういう中で人のいい奥山は、自分の家を仲間の悪たれ暴走族に開放したのだから奥山の家はさながら暴走族の本拠地の様になってしまい、「このままでは家も息子も失ってしまう」と両親が釧路児童相談所に頼みこんで奥山が家庭学校に入校したという経緯がなんとなく面白おかしく喋り合える部分があって、奥山にはなんともいえない和やかな安心感があるし、「自分には頑張っている両親がいる」という余裕の気持ちが奥山をさらに大きく見せて、今はもう我が寮十三人のたばねなのである。

九月十三日 晴れ

隣りの優しいおばさん本橋さんに初めて手紙を書き始めている。

「本橋のおばさんへ

おばさんお元気ですか。僕も少しづつ家庭学校の生活に慣れて来ました。ここに来てから畑の土おこし、草とり、草刈りをやりました。どれも初めての事なので、他の人より大分おくれますが、なんとかついて行けます。

仙台の天気はどうか。東北地方の天気はこちらでは全然わかりませんので、いつも心配しています。家庭学校はとても行事が多い所です。僕が来てからも、サロマ湖にキャンプに行ったり、北見まで映画に行ったり、ソフトボール大会などがありました。今日はこれから温水プールに行つて来ます。

学校でも、寮でも、だいぶ友だちが出来ました。毎週日曜日、礼拝堂で賛美歌を唄ったり、

聖書を読んだりします。そして毎月一回朗読会というのがあります。

おばさんからもらったお守りは、机の上の棚においています。一日最低一回は手を合わせています。そして一日も早く仙台に帰れるように祈っています。

おばさんも元気でお店で頑張ってください。

平川 幸策より」

律儀な感じの幸策の手紙を急いで投函すると共に、この本橋さんというおばさんはこれからの幸策の大切な心の支えだと思い、電話と住所を別に控えておく。

他に仙台の同級生（女子）からの温かい手紙が一通一通くる様になって、眼をうるませながら読んでいる幸策である。

九月十四日 晴れ後くもり

幸策の母さん（継母）から初めての電話、

「私、平川幸策の母で御座います。この度は子供がお世話になることになりまして、なんとお礼を申し上げてわかりません。

ところで幸策はきちんと暮しておりますでしょうか。」

とても真面目に幸策君のペースで元気になるつつありますのでどうぞ御安心下さい。

「そうですね、それで安心致しました。

あの子が私をどう思っているのか全く分からなくて、いつも悩んで来ました。幸策が私を実の母だとばかり思ってくれていると思って来ましたが、本当は小さい頃から違う母だということを知っていたということを今度の事件があって初めて私が判って、私はショックで寝こんでしまいました。私は泣いてばかりいます。自分が生んだ子だ、きちんとした男の子に育てなければと思って厳しく躰けて来たのが全部ままた母の冷たい意地悪だと世間の人が見ていたということ、何よりも幸策自身がその様に思って恨み続けていたというのがショックなんです。」

それはもう仕方のないことです。お母さんが心から幸策君を愛して厳しく躰けて来たということを段々幸策君が分かってくる様になったら、心が通い合うようになって行きますよ。

「そうですね。私はもう私の気持ちを幸策が分かってくれることばかりを心から祈るばかりです。」

今度の正月には帰省出来ますから、その時に家族の皆さんでゆっくりいろいろ語り合えば、お互いの気持ちが少しづつほぐれて行くと思います。

「児童相談所の先生もその様に言って下さるんですけど…。…実は私…幸策が正月に帰省してくることはためらうものがあるのです。」

どうしてですか？

「私共、今度引越したんです。前に住んでいた所とは正反対の方向なんですけど、近所には同じ会社の人が何軒かおられますし、この町内でも皆さん、幸策のやった事件についてはそれはよく知っています。あの事件についての様々な町内会の注意書きのようなものが今も仙台中の掲示板に貼られたままですし、私は辛くて町の中を歩けないのです。

主人はそのことをどの様に考えているか分かりません。ただ幸策が正月に帰ってこれるとそればかり楽しみにしていますが、私は正直に申し上げて幸策が正月に帰って来るのには反対なんです。」

僕はなんとも言い様がなくて、「そうですかあ…」と溜息だけの言葉でとに角電話を終わるしかなかった。

継母はよく通る落ちついた声で理路整然と自分の気持を伝えていたし、そしてそれは説得力があって僕はただ聞くだけだったが、なんともすっきりしない。なんというか母親のおろおろした息せき切ったような気持がなんにも伝わって来ないし、いやむしろその反対の落ちつきには、一般の仙台市民のような客観的な視点が感じられて仕方がなかった。

幸策はこの継母との暮らしの中で、厳しく躰けなければと小学生の頃から道路掃除や、公共ごみ捨て場の清掃などをさせられて来た。

おそらくは理路整然とした指示や命令に幸策は表面黙々と従って来たが、特に中学生になってからは毎回毎回継母の指示に従いながらも気持は益々荒らぶって来ていたのだろう。

幸策、母さんから電話があったよ。

「ああ、そうですか」。

全く無表情に素っ気なく答えていただけの幸策の後姿には、全く継母の居ることすら考えたくないといった感じの拒否感があった。

そんな幸策の厳しい後ろ姿を見ながら、僕は又一方では継母がなんとなく可哀想にもなっていた。前の妻が生んだ子供を育てて行くことの難しさを思っていた。全く知らない前の妻の生んだ子供をどの様にして育てて行ったらいいか？それは本当に大変なことかも知れない。

九月十六日 晴れ

午前十一時頃、父さん初めて来校。

一昨日の継母との電話の中で今日父さんが来ることは聞いていたので、幸策は教室には出席させず寮で待っていた。

「平川です。息子がお世話になっています」

と伏眠がちに僕に低い声で挨拶した後、幸策に土産の本とお菓子和ジーパンを持たせた後、十分位ですぐに帰ってしまったのに呆然とする。幸策と六分位も話したか…。

病院は退院したとの事だったがどこかに不健康な感じがあり、何か人と会うのを避けている

様な、人からいろいろ質問されるのを避けている様な弱々しい無口に憔悴が感じられ、僕も挨拶を返すのが精一杯だった。

遠い仙台から二十時間以上かけて家庭学校までわざわざやって来たのに息子と居たのがわずかに六分位、

汽車は午後三時二十分までありませんからもう少しゆっくりして下さい。

といくら言ってもそそくさと、待たせていたタクシーにとび乗ってさっと帰ってしまった。  
幸策に

父さんは何か言っていたのかい？

と聞いたら、ちょっと考えてから、

「前の母さんを恨むなよって言っていました」  
とぼつんと答え、僕はその事だけを言いに来たのかも知れない父さんの気持を思い、じっと腕組みしながら考えていたら、あたりに誰も居なくなってから家内が

「あなたは気がつかなかった？ 幸策君のお父さん酒臭かったわよー」

と少し怒った声で言い、僕は全く気がつかなかったが有り得ることだと黙って聞いた。

それにしても幸策の父さん、午後三時二十分までの時間、遠野のどこかの店で酒を飲み直すのだったら、午後からなら開いている寿司屋「春駒」を紹介したのにな…と黙って父さんの気持に思いを寄せていた。

九月十九日 晴れ後雨

入校して五十日近くたち、幸策が段々皆に認められてくると共に、幸策の方も自分以外の人の生き方に眼を向ける様になって来て、じりっじりっと大きくなって来た気がする。

「僕は家庭学校に来て初めて考えていたことは、絶対に中学校にもどることだった。

今でもその考えは全然変わらない。今僕は副島教室だが、いまに藤田教室に上がってクラスで五番以内の成績を取り、そしてこの家庭学校を立派にちゃんと卒業して、仙台の中学校にもどって又勉強するのが夢だ。又、生まれつき良いこの体を、ここでいっそう強く逞しく丈夫にするのも大切な夢である。もう一つは、英語、フランス語、ドイツ語を覚えて、将来は一人で海外旅行をしてみたいと思う。

地理と外国の歴史を勉強しているのはそのためである。そして中学校を卒業し、高等学校に入学するつもりだが、もし出来なければ本州の中部地方で伝統工芸の職人になりたい。

と共に、日本アルプスの穂高岳や槍ヶ岳、白馬岳、又北岳や荒川岳、谷川岳に鳥海山、青森の八甲田山にも足をのばして登りたい。

日本の代表的な山を夏山・冬山全部登り終わったら、今度は外国のロッキー山脈やアルプス

山脈などを登る。将来、絶対にアメリカ、カナダ、フランス、イギリスに行ってみたい。

もし更に行けたら、ギリシャ、スイス、ポルトガルとスペインにも行ってみたい。

だがこれには金運に恵まれないととても出来そうもないことだとは、なんぼ僕でもよく分かっている。そして最低でも三十才以上は生きたい。最高なら百才まで生きたいがしわだらけのよぼよぼは嫌だから適当な年齢で死にたい。自殺というのではなくて、自然に死にたい。そして死ぬまでに、一度でいいからダイヤモンド、金、銀、プラチナのほんものを自分の手で触ってみたい。」

九月二十四日 くもり後快晴

同級生六人と隣りの本橋のおばさんから分厚い手紙が沢山来て、にこにこしながら読み続けている。こんなに明るく笑い続けると眩しいようなそれはいい男になる幸策だ。そして今日の日記も又自信に満ちている。

「この頃みんな卑しいというかなんというか分からないが、飢えている人達の様な行動をすと思う。食事の時に、量の多いのをすばやく取ったりする。それとは逆に、自分の嫌いなものは量の少ないを取ったりしてみっともないと思う。やはり卑しいという気持と、我がままぜい沢な気持とが混じってその様な行動を取るのであろう。普段とても立派に見えたり、いい話をしたり、先生方にとっても信用があるような人がその様なことをしていると情けなくなる。

その点、僕は自慢ではないけれど、母親がいろいろなことを厳しく教えてくれたことを守っているから、みっともない行動はしない。これは母には感謝しなくてはいけないとこの頃思う様になった。この様な食べることに関しての基本的なマナーは生徒一人一人が積極的に直さなくてはいけない。又、先生もちゃんと見ていなければ駄目である。こんな恥ずかしい癖は、社会に出た時にその人の人格が全部とっていい程人に知られてしまうからだ。

良い性格なら全部見せても良いが、この様な恥ずかしい癖は自分も親も恥をかくだけなのである。」

幸策の正論には脱帽だし、46才の僕もこっぴどく叱られた気がして小さくなっている。

それにしても今日初めて継母から受けた嫉について感謝の言葉を書いていることに、なんだかじんとしている。

継母にいつか話さなければならぬ。

九月二十六日 くもり

幸策は絶対にコカコーラを飲まない。コーラはもう皆の好物だけに、コーラを絶対飲まない幸策はそれだけでも変人扱いされている部分もあるが、幸策がゆっくりコカコーラの害を語り始めると皆やっぱり何も言いなくなってしまう。

「コーラというのは人間の骨をいつのまにか弱くする物質が入っているし、長い間飲み続けると、考える力も弱くなっていくと母さんが言っていたから僕は飲まない。」

じっとと幸策の話を聞いていた皆だったが、

「俺、骨がとけてもいいから飲むよ」

「元々頭が鈍いからコーラ飲んだって大差ないしー」

などと口々に言いながら、皆美味そうにコーラを飲み始めていた昼休み、幸策は説得を諦めたかぐうぐう昼寝をしていた。

「僕が何故家庭学校に来たかは先生が一番よく知っています。小学校四年生までいた東京と仙台では、ずい分いろいろ違いました。

言葉は全然違って、遊び方も全然違うし、とてもさみしかったのは事実です。

家庭の中でもずい分変わりました。父は東京に居た頃もずっと酒を飲んでいましたが、仙台に来てからはげしく飲むようになりました。

夜中に大きな声でレコードを聴いたり、山に登るピッケルを振り廻したりする事もありました。母親は朝から晩まで怒っていました。妹には絶対怒りませんでした。それは妹が母親の本当の子供であり、僕は違うからです。

そんなことばかり続いて、僕は不満が段々たまってひねくれ者になってしまいました。

だが友達には八つ当たりはせず誰れとでも仲良くしていましたから、それは家の中とはずい分違う態度だということは、僕自身がよく知っていました。二重人格なのです。

母親とは中学校になってから口喧嘩をする様になり、遂に母親の背中を正拳で打ってしまいました。いつも不満は親だけにおつけ、隣り近所の人や友達を僕をおとなしい子供だと思っていたと思います。そんな中で僕は不満を自分からとってしまう仕事で一生懸命だった。好きな自然の中に入りこみ一日中遊びつくした。山に行けば山ぶどうやくわの実、栗などをとっては町を見下して遊び、川では水の中で遊んだり、激しい流れや静かな流れを見つめては心をおちつける訓練をした。

しかし、不満はたまり過ぎて僕は気が狂いそうになった。この不満を一番手っ取り早く取り去る方法はないものかと僕はもう何の関係もないよその小さな子供を、スキーのストックで刺してしまった。あの時は僕は狂っていた。自分も死ぬつもりだった。しかし、あの子供が死ななくて本当に良かった。僕も死ななくてよかった。あやまってすむ事ではないが、自分の卑劣な八つ当たりをいつかあの子に深くあやまるつもりです。」

幸策のほとぼしる様な烈しさに僕はただもう圧倒されていた。

九月三十日 くもり

福島での「東北・北海道教護院専門委員会」に出席した後、仙台に寄るか東京に出るか迷ったのだが、仙台は次の機会に寄ることにして東京に出る。

幸策が五才まで実の父母と住んでいた文京区小石川を訪ねたかったからである。事前に東京の友人に頼んで幸策の実母の兄の住所が判っていたこともあって、僕はまっすぐ小石川に入った。伝通院近くの小石川二丁目から三丁目の曲りくねった細い道は戦前からの本造りの町だと

いう。大きな印刷会社ではなくて、如何にも町工場らしい印刷屋、製本屋その他何んと言うのが判らないが、本になる前の表紙の梱包を積んだフォークリフトなどが忙しく動いているなんとなく昔ながらの本造りの町の雰囲気人が懐しく温かい。

そんな町の南端近くに「東製本」があった。

「東製本」は幸策の実母「東よし子」の兄の会社で、兄の東一郎氏にお会い出来れば幸策の実の母親の消息が判るかも知れないと思ったからだった。

東一郎氏は温厚な方だった。幸策の事件で、幸策の生まれ育ったのがこの小石川であること、幸策の実母もそこに居るのではないかと七月七日頃から十五日頃にかけてのマスコミ各社の取材は大変なものだったらしく、最初に僕が工場の一隅の事務所に入っていった時の表情は、警戒と怯えと厳しい拒否感でとりつくしまがなかったが、僕が自分の名刺を出して今の幸策との暮しを話すと共に、「幸策の将来を考えるにはどうしても実のお母さんとお会いしておきたいのです。」とここを訪ねた真意を淳々と話し始めたら、次第に表情が和んできて、お茶を入れてくれながらすべての事をなんでも打ち解けて話してくれた。

「私の妹と平川さんが離婚したのはもうかれこれ十年も前ですから、私共はもう平川さんのことは忘れていました。ただ幸策のことは可愛いもんですからいつも思い出していましたし、妹も辛そうに時々思い出している風でしたが、五年前に結婚して今は代々木八幡に住んでいます。そしたらいきなり今度の事件でしょう。私共は新聞社の取材を受けて初めて知ったんですけども、本当にびっくりしました。しかし、妹はもう平川さんとは何の関係もない訳ですし、私はマスコミの方には妹の住所は一切知らせませんでした。

平川さんと妹は大学の同級生で学生運動で知り合ったらしいんですが、どうして離婚する様になったかはよく分かりません。

唯、妹は幸策のことはいつも思い出していた様です。平川さんについては「酒さい飲まなければいい人なのに…」と時々ぼんやり考えこんでいました。

マスコミの方というより新聞社の人たちは本当に根掘り葉掘り聞きましたが、私は何んにも言わないものですからさあーと潮が引く様に来なくなってほっとしています。」

僕は東さんに心からお礼を述べて、教えて頂いた渋谷区代々木八幡を訪ねた。

代々木八幡は新宿に近いのに不思議に静かな住宅街、駅を下って十分ばかりの昔ながらの和菓子屋さんの二階のアパートに、旧姓東よし子さん、今は池田よし子さんが静かに待っていてくれた。三才になったという男の子を抱き上げながらなんでも素直に答えてくれた池田よし子さん、即ち幸策のほんとの母さんの表情には何かふっ切れた様な穏やかさがあり、幸策そっくりなのになんともいえない親近感が湧いて生きて、僕はいっぱいお話をうかがう事が出来たし、僕も一生懸命に幸策の将来についての考えを述べた。

その中でやっぱりそうかと思ったのは、K新聞社だけは池田さんの住所を探り当て、七月五日には取材を終えていたことである。一切を取材し確認したK新聞社は、おそらく東京本社の判断で以後の記事は先述した様な経過で終わらせたのだと思う。

「私と平川さんは同じ大学でした。年令も同じです。あまり喋るのが上手ではないというよりむしろ口下手の平川さんは、私共の仲間と本当に目立たない存在でした。しかし地道に勉強



し、いざ行動となると横の連係（ママ）をとりながら素早くスクラムの核となるんです。

私共は一九六〇年の安保でつながり、あの年のデモには全部参加しました。六月十五日に樺美智子さんが亡くなったデモの時の情景は今もはっきり覚えています。私たちは国会内の南通用門内側の構内集会を闘いとした訳ですけど、機動隊はどんどんいなごの様にとびかかってくるし、私たちの仲間は次ぎ次ぎに血を噴き出して倒れて行きました。その時平川さんはあの小柄な体で私を必死でつかみ続け、私も平川さんも軽い怪我はしたものの逮捕されずに逃げ切りました。千人以上は重軽傷を負ったと思います。六月十八日のデモにも二人で参加しましたが、午前〇時に日米新安保条約が自然承認となった時はただ泣き続けました。その後しばらく大学には行きませんでした。九月からなんとなく大学に行き始めました。平川さんはほとんどあれからは大学に行かなかったと思います。それでも大学は卒業したから一流のK新聞社に合格したんだと思います。

私はその後大学を卒業して兄の会社を手伝っていました。平川さんとはずっとつき合っていましたし、平川さんの地味な人柄が益々好きになったというか、なんというかで一九六三年に結婚しました。二年して幸策が生まれて私共はとても幸せでした…と思います。しかし、本当は少しづつ何かの違い始めていたのです。平川さんは元々無口な人ですし、普段の人付き合いもごくごく狭い人です。

K新聞社に入ってから益々そういう傾向は強くなり、社内に友人は一人も居なかったと思います。人と気易くやあやあとつき合うという事の出来ない人ですし、上司や同僚と縄のれんをくぐるという事もない人でした。いつの間にかH大学のかつての仲間とも行き来がなくなりましたし、私の友達が訪ねて来ると嫌な顔をするものですから、私の友達も段々姿を見せなくなりました。学生の頃から酒は飲んでいましたが、結婚してからびっくりしました。会社から帰ってくると黙々と一人で飲み続けるのです。

休みになると穂高や谷川に一人で行って登山をしていました。私はいつも留守番でした。幸策が大きくなったら一緒に登るんだとそればかり楽しみにしていた様です。

K新聞社というよりマスコミ全体なんですけど、平川さんの給料はとても高いんです。

私の兄の会社の少なくとも倍の給料をもらいながら、平川さんはいつも会社には不満ばかり持っていました。ぶつぶつぶつぶつ言いながら酒を飲み続ける時の平川さんのそばに居ると息苦しくなって、私は幸策が五才になる前に家を出ました。幸策を連れて出ようかと随分悩みましたが、平川さんがあんなに幸策を可愛がっているのを見るとそれも出来ず、誰れにも黙って家を出ました。

暫く四国の伯方島という島に居る伯母の家に居ました。伯母は『それは別れた方がいい、二人とも若いのだから』と言ってくれ、私は三ヶ月ばかりその島で暮らしました。

伯方島には自然塩を作っている小さな会社があり、伯母と一緒に私もそこで働きました。

自然塩を作る仕事をしているうちに私の心が段々晴れ晴れして来ました。この仕事は人の役に立っていると思い始めたらとても嬉しくなったのです。三ヶ月後に東京へ帰り、平川さんとお会いして『離婚届』に判を押してもらいました。平川さんは何んも言いませんでした。幸策のことも全く言いませんでした。私も心を決めていたので聞きませんでした。それから何年かして平川さんが再婚したことを大学の仲間から聞き、良かったと思いました。私もそれから二、三年後に再婚し、もう若くはなかったのですが、この子を産みました。今の主人は都の福祉事務所で働いています。

とても明るい人で、平川さんの事も幸策のことも全部理解してくれた上で結婚してくれました。主人は初婚です。私は子供を育てながらパートで近くのおそば屋さんで働いています。帰りは夕方なんですけど、買物を済ませてから近くの八幡神社の境内で休んでから帰ります。その八幡神社から見える夕景を見ていると気持ちが休まるのです。

やっぱりどこかで幸策に悪いことをしたという気持ちが正直ありました。

そんな毎日の或る日、新聞を見て『大変な事件だなあ〜』とは思いましたが、遠い仙台の事件ですいつの間にか忘れていました。

そしたら七月五日の日に突然K新聞社の記者が来て、

『実は仙台の通り魔事件の犯人の少年が、うちの社員の子供であり、あなたが実のお母さんであることも判って来て、あなたのお話をいろいろうかがいたいと思ってうかがいました。』

と言って取材を始めたのにはもう動転してしまい、ただおろおろするばかりでした。

どうしてあの小さかった幸策がこんな事件を起こしたのか全く見当もつきませんし、何んにも言うことは出来ませんでした。そしたらその記者の方も私に同情したのか手帳をしまって、『奥さんも大変ですよ〜』と云って十分ばかりして帰られました。その後は一度も来ません。

夜に思い切って幸策の起した事件について全て話し、今日、K社の記者が来た事も話しました。じっと黙って聞いていた主人は『それは仕方のないことだよ、君には全く関係のない平川さん御一家の問題だよ』

と言ってくれて、それから幸策のことについては全く話しません。主人は優しい人ですし、私の辛い気持ちを全て分ってくれた上で黙っているのだと思います。

こうして家庭学校の先生がわざわざ来て下さったことも、幸策の今の生活も、夜に主人が帰って来たらすべて話します。

今日は本当に遠い所有難う御座いました。幸策のこと、これからも何卒よろしくお願ひ致します。』

僕はなんだか深い感動に包まれて、代々木八幡から代々木上原まで黙って歩き続けた。

十月二日 晴れ

一週間振りに家庭学校へ帰って来てほっとしながら、留守中の一人一人の事をじっと聞く。昨日行われた秋の「マラソン大会」ーグラウンドから平和山頂上往復十料ーで幸策は、

五五分三九秒一 四五位（実走八〇名）

だったとかで、陸上競技に自信を持っていた幸策だけにこの成績はがっくりしたらしく、

「僕は山を走る長距離は初めてなんです。」

とちょっぴり恥ずかしそうに頭をかいていた。

十月四日　くもり後晴れ

夕べ電話があった通りの時間に、継母がタクシーから降り立った。わずか一週間前に幸策の実の母と会い、今日は継母と会う事になった不思議さに人生の妙を感じながら、じっと玄関に立って幸策と二人待つ。

継母はあまり大きくない人、幸策はなんとなくどう出迎えていいのかごちない困惑の表情でもじもじしていたら、そんな幸策の様子をさっと見咎めた継母、

「幸策さん、こうして母さんがわざわざ仙台から家庭学校まで来たというのに、母さんいらっしやいの挨拶も出来ないのですかー。」

といきなり烈しい声でたたみこむ様な叱声かとんで来たのには、幸策よりも僕の方がびっくり仰天の思いだった。

僕も家庭学校に来て十六年、様々な実の母育ての母の訪問を受けたが、この様な烈しい叱声でいきなり怒られる情景に接したのは初めてだったし、呆然としてもいた。

幸策は或る程度というよりは予期していたでもあったのかさして動転する風もなく、

「どうも済みません…。」

今日はどうも遠い所有難度う御座いました。」

と淡々と言い直し、僕はその事にも又深く驚いていた。

僕は一週間前に東京で幸策の実の母さんに会って来たことも10年後くらいには言おうと思っていたし、今もその様に思っているが、実母と継母のこれだけ大きい温厚と激昂の格差の中で十三才になった幸策の大変さを思い、夫である平川氏の大変さにも又同情していた。

「A大学文学部児童心理学科卒」の継母のそれはそれは詳しく喋り続ける弁舌に、農業高校定時制中退の僕はただもう黙って聞き続けた、大野中学校卒業だけの家内は黙々と十四人の鉄火井にもう一つ多く作って持って来て、黙って引き下って行った。

「私はもう自分の実の子以上に幸策を自分の子として育てて来ました。それなのにどうして今度のような大変な事件を起こす様になったのか？私にはどうしても納得がいきません。」

私は幸策が私のことを実の母だと思っているとばかり思っていました、もう五才の時から知っていたという事を今度の事件があって初めて知って、ショックで今も眠れないでいます。

主人はとても気の弱い人です。いつも酒ばかり飲んでいきますからアルコール中毒になっています。毎晩一升は飲みます。

この前に主人が家庭学校へ来た時は、前の日に仙台を発ってその晩は旭川に泊り、次の日は家庭学校に来た後サロマとかに泊って、四日目によく仙台に帰って来たんです。

あの時も私には黙って仙台の家を出て、帰ってからも私には幸策の様子など話してくれませんでした。

正月の帰省については、主人がとても幸策の帰って来るのを待っていますので、私も待つことにします。」

僕は黙って継母の話の聴き続けた。そして、この夫婦はいつか離婚する、いや、した方がいいとじっと思い続けながら黙って聞いた。

十月六日～八日

六日から八日までの日高、えりも岬、十勝と廻ってきた研修旅行が本当に楽しかった。

あまり喜怒哀楽や感激の表情など見せない幸策だが、えりも岬の奇石が一行になって太平洋へ沈み込んでいく見事な自然美や、日高連峰の魅力には思わずひきこまれる様にしていく様に長い時間じっと見つめ続けていた。

唯ちょっと最初は気がつかなかったのだが、景色のいい場所では必ずといっていい程写真を撮る度に、いつの間にかすうっと幸策が居なくなってしまい、最初のうちは僕も家内も皆も「幸策！幸策！」と探したのだが、その度びに幸策は遠くから手を振って写真に入らない意志を丁寧に示し、そのうちに僕ははっと気付くものがあった、今度の素晴らしい景色の連続だった研修旅行の写真に結局、幸策は一枚も入っていないのである。

もう一つ心に残ったのはバスの車内でのこと、ガイドさんに指名されて一人一人いろんな歌をうたっていた中で、皆がうたったのは全部が全部男か女のアイドル歌手の歌、そしてそれは当り前のことに思っ楽しく聴いていたのでだが、幸策だけは違った。

「僕は石川啄木という人の短歌をうたいます。」

とはっきりした口調で言った後、

「たわむれに母を背負いて そのあまり 軽きに泣きて 三步あゆまず」

と淡々とした抑揚でうたった。皆は呆っ気にとられて幸策の方を見返し、僕は新春の宮中歌会で読んでいく詠みまわしにそっくりなことに途中で気付き、うーむと思わず唸ってしまった。

「父さんから教えてもらいました」

と幸策は特別の表情でもなくすぐにまた眼をつぶって仮眠の様子になり、僕も様々な思いが交錯してやはりじっと眼をつぶっていた。

十月十二日 快晴

今日は皆が楽しみに楽しみにして来た園遊会、各寮の出店は次の通り。

桂林寮 大福もち  
石上館 豚汁  
柏葉寮 ワタアメ  
掬泉寮 焼きイカ  
楽山寮 フライドチキン  
洗心寮 焼きそば

平和寮 ホットドッグ  
 住宅 コーヒーと果物  
 青年会議所 汁粉  
 理容組合 あんこもち

上天気に恵まれての大変な賑わいの中、幸策はどんな風にして食べ歩くのかなあ～？  
 とのび上がって見廻したら、皆と同じ様にわいわい笑いながら、皆と同じ様に大きな口をあけてむしゃむしゃむしゃむしゃなりふり構わず次ぎ次ぎに各店を食べ歩いていた様子がやっぱり皆とおなじで、なんだかほっとしながら腰をおろしたのだった。

十月十四日 晴れ後くもり

今日は秋の「運動能力テスト」、幸策の記録は「けんすい」以外は中二としてはまずまず。本人はもう少し自信があったらしく、少し浮かない顔をして自分のノートに書いていた。

|          |            |
|----------|------------|
| 一五〇〇米    | 六分二七秒      |
| 五〇米      | 七秒九        |
| 走り幅跳び    | (一回目) 三米八二 |
|          | (二回目) 三米七五 |
| ハンドボール投げ | (一回目) 二十一米 |
|          | (二回目) 二十二米 |
| けんすい     | 二回         |

けんすいは苦手らしく二回目はようやくとで合格となり、誇り高い幸策だけにその格好の悪さにしきりに赤面していた。幸策よ、人間は得手不得手があるから面白いんだ、けんすい位でがっかりするな。

十月十六日 雨

今日は午後から雨となり、体育館で「屋内運動能力テスト」を行う。

|        |     |        |
|--------|-----|--------|
| 反復横跳び  | 一回目 | 四八回    |
|        | 二回目 | 五三回    |
| 垂直跳び   | 一回目 | 五三 cm  |
|        | 二回目 | 五三 cm  |
| 背筋力    | 一回目 | 一三〇 kg |
|        | 二回目 | 一五〇 kg |
| 握力 (右) | 一回目 | 三一 kg  |
|        | 二回目 | 二二 kg  |
| (左)    | 一回目 | 二九 kg  |
|        | 二回目 | 二二 kg  |
| 上体そらし  | 一回目 | 五五 cm  |

|       |     |       |
|-------|-----|-------|
|       | 二回目 | 五七 cm |
| 立位体前屈 | 一回目 | 一八 cm |
|       | 二回目 | 一九 cm |

同じ中二の田中と比較すると一四日のも含めて断然幸策が上なのだが、握力だけはかなり劣っているのがはっきりして、おかしいな、おかしいなと何度も何度も握力計を見直したり握り直しをしていたが、駄目なものは駄目、田中に一つでも負けたのが如何にも悔しそうな幸策だった。

十月二十日 晴れ

今日のサッカー大会に初めて二試合とも出場させる。「幸策！試合に出ろ！」と僕に指示されて、

「えっー、僕ですか?!」

とびっくりしていた幸策だったが、出た以上は頑張らなければと懸命に走り、ボールを追ってグラウンドを走り廻っていた。

決して上手ではないが、どんな時にも真面目に全力を出し切ってやり通す幸策のサッカーは見ていて実に気持ちの良いものだった。

試合の方は、

勝 平和寮に 二対〇

敗 洗心寮に 二対五

「今日のサッカーに僕を二試合とも出場させたのは、何だか不思議です。それも『攻め』の組に入れたのは、僕の消極的な性格を積極的な性格に直そうとしているからですか?」

と書いている幸策の日記を読みながら、「うん、それはある」と一人頷いているのは僕。

もう一つ、今日幸策が仙台の友だち（男子）に書いた手紙の半分が「ハングル」即ち朝鮮語で書いていることに、僕は眼をぱちぱちさせてびっくりしていたら、

「僕は覚えたくて朝鮮語を覚えたのではなく、鑑別所であまりにひまだったから『朝鮮語辞典』を毎日調べているうちに或程度自然に覚えてしまったんです。母音と子音を組み合わせて音節単位に書く表音文字なので、英語などより比較的覚えやすいです。」

とこともなげにさらりと僕の問いに答いて、四谷や坂田などが、

「幸策は時々変な暗号で僕等を馬鹿にします」

と時々怒っていたのを思い出し、「これは僕などもハングルでからかわれているかも知れない

なあー」と頭をかいている。

十月二十五日 晴れ  
今日の日記にも又圧倒されている。

「僕の本心はキリスト教を信じていません。

僕の信ずる宗教は日本の大乘仏教ではなく、大乘仏教とは反対の、自己の悟りを第一とする消極的な小乗仏教です。キリスト教を信じない理由は、キリスト教というのは、愛を根本主義として魂の救いを得ようとするものだからです。僕は小さい頃から自分以外の人間は信じたことがないからです。

ましてや愛するなどということは絶対に信じません。又、僕は人を頼るのも人に頼られるのも嫌いだからです。だから僕は日曜になると礼拝に出るのが本当は大嫌いです。

信じていないのに信じたふりをさせられて、聖書を読んだり、賛美歌を歌わされたりするのが嫌いです。」

うーん、困ったなあ…幸策を呼んで何か話そうと思ったのだが、大体、僕自身「永平寺」を大本山とする曹洞宗の信徒だし、死ぬまでになんとかして「正法眼蔵」全九十五巻を読破したいと思っている信徒で、寮でのキリスト教による朝夕拝と日曜ごとの礼拝に出る度に異教徒を感じてじくじたる思いで暮している部分があるだけに、今日はもうなんとなく幸策に頭が上がらない気分である。

十月二十六日 曇り  
十四日と十六日に行われた「運動能力テスト」の寮別の順位が判ったので廊下の掲示板に貼り出す。

運動能力テスト（石上館十三名中）

平川幸策

|          |    |       |     |
|----------|----|-------|-----|
| 一五〇〇米    | 五位 | 五〇米   | 六位  |
| ハンドボール投げ | 六位 | 走り幅跳び | 三位  |
| 反復横とび    | 六位 | けんすい  | 八位  |
| 背筋力      | 七位 | 垂直跳び  | 四位  |
| 上体そらし    | 五位 | 握手（右） | 十位  |
| 立位体前屈    | 一位 | （左）   | 一三位 |

十三人中幸策は田中に次いで若い十三才だけに、この順位は皆の尊敬を集めるに十分な順位なのである。

「今日の運動能力テストの結果を見て、僕はやっぱり自分に自信を持ちました。僕が心から信じられるのは平川幸策、即ち僕自身だけなのです。自分を左右出来るのはこの僕自身だけだからです。良くするも悪くするも自分自身で決められるからです。だから僕は昔から自分だ

けの単独行動で生きてきた為、他人と一緒に行動するというのがが手で、これは欠点といえ  
ば欠点である。しかし、他人と一緒に行動するとお互いに足手まといになることがあり、その  
ため人に頼ったり頼られたりするのが嫌いになってしまうのである。

だから愛を根本としているキリスト教は、カトリックもプロテスタントも、ギリシャ正教も、  
英国教会も、ロシア正教も嫌いなのです。人に甘えたり、神に甘えたりするのはよくないこと  
です。」

うーん、今日も又幸策にやられっぱなしである。

十月三日（「三十日」の誤記かー河原） くもり

十月に入ってから仙台の同級生との手紙のやりとりが頻繁になって来ているが、これはとて  
もいい事だし、時々見せに来る手紙に見入っているのだが、今日の手紙には改めてびっくりし  
ている。

「僕の起した事件で誤解されると大変に困るので書きます。僕の起こした事件を書いている  
『河北新報』も『毎日』も『朝日』も『読売』も『日経』も、書いていることは全然違うのです。  
刃傷した動機だって、その場の様子だって、僕のことだってみんなうそです。

僕の家庭だって、ほんとうの中身のことは全く書いていません。僕にはもっと深い理由と考  
えがあったのです。それを知っている人間は、僕自身のほかにはあと一人いますが、これは一  
生秘密です。僕がいつか死ぬ時に君にだけ教えて死にます。バイバイ」

僕は黙って読んだ後幸策に渡して封をして投函したが、僕にわざわざ見せに来たのは一つの  
幸策としての意志の表示かも知れないと思いつつも、新聞報道のどういう部分がどう違うのか、  
大人になってからの幸策といつか語り合おうかなと思いはじめている。

十一月一日 雨

「親に手紙を書きます。」

とわざわざ言いに来て、初めて両親に手紙を書き始めている。十月四日に来た時に継母親に  
こっぴどく「手紙を書きなさい」と言われたことに、今日になってようやく応じたかたちなの  
である。その少年も、実の父であっても違う父であっても、実の母であっても違う母であつて  
も、とに角一応は「父さん母さん」と口にするのだが、幸策は絶対にしない。両親に向っては  
やむなく父さん母さんと一応口にはしているが、他に向ってはすべて「親」と呼ぶだけである。

「親だから親でいいんです。」

本心は親とは思っていない幸策の頑固な抵抗の精神の表れかも知れない。

十一月五日 晴れ後くもり

段々日が短くなって来て今日はまだうす暗かった早朝六時、全校で平和山に登る。



## 平和山登山 六番で走り登る

毎月五日に家庭学校の中心平和山（標高三七〇米）に登って家庭学校創立者留岡幸助先生の記念碑に参拝するのが家庭学校の大切な恒例行事なのだが、九月も十月も「どうして五日にこうしてぞろぞろ登らなければならないのかな」と言葉には出さなかったが、顔にはそう書いている甚だ懐疑的な歩き方で最後尾あたりをゆっくり登っていた幸策が、今日は何と我が寮で二位、全校では六位に入るという汗びっしょりの頑張りを見せたのは大したことだった。六位といってもだだっとな集団になって頂上に走り着いたというから、一位と同じ様なもの、如何にも少年らしいはにかみと誇らしさを見せて草原に寝倒れていた幸策、後から登って行った僕と眼が合った時の小さな微笑が清冽だった。

## 十一月八日 曇り後小雨

十六才すんでから入校して来た坂下、脳内腫瘍の手術のあと再発監視のためとか、切除した頭がい骨の一部をかぶせないまま頭皮だけの頭に髪が生え、そこに誤ってボールや石が当たったりしたら大変なので食事と寝る時以外は必ずヘルメットをつけて暮らしている。

とても好人物の温和な十七才なのだが、ときどきにたにたと独り笑いをして歌ったり、夜中に突然とび起きて勉強を始めたりして、一緒に暮らす年下の少年たちの方がとても大変で、同じ部屋には性格の温和な安田と四谷とそして考え深い幸策を配しているがこの三人の苦労は大変なもの。その坂下、自分の部屋の天井、壁、机の正面の三カ所に「東大を目指す」「来年こそ東大へ」「東大合格万才」と太いマジックで書いた紙を貼って自らを鼓舞しながら、小学五年の学習で難渋しているのはただ事ではない。

しかし、掃除をしても、落葉掃きをしても寮庭の草とりをしても最初から最後まで決して手を抜かないで真面目にやり終える真面目さには皆しんから敬服するものがあって、「東大合格」を目指しているならそれはそれでいいんじゃないのと誰一人揶揄する事はない。しかし、坂下が他人の部屋に入って大切にしているカセットや、友達からの手紙などをほじくり出したりする様な行為はやはり許されない。そして遂に

—幸策が四才年上の坂下をぶん殴った—

「僕は随分我慢して来ました。僕は四才も年下だし、我慢することにはなれているからじつと我慢して来ました。だが坂下さんは、僕が我慢すれば我慢する程僕に狙いをつけて、いやみを言ったり、ちょっかいを出したり、僕に来た沢山の友だちからの手紙などを机から探し出しては投げ散らかすのです。

今日はもう僕は我慢の限界でした。

もう何も考えないで坂下さんの頭をたたいてしまいました。あの時、坂下さんの頭がい骨のない所の頭をたたいていたら、僕のにぎりこぶしは坂下さんの頭の皮を破って脳味噌を直撃して、坂下さんは即死したでしょう。

僕は何んも考えないで坂下さんをたたいてしまいました。僕はあの事件に続いて又刀傷をすることでした。僕は自分のした事にあまりびっくりしなかったの、あまりびっくりしなかった自分自身に今びっくりしています。本当に僕はいつの間にか恐ろしい人間になってし

まった。」

帯広児童相談所からのたつての依頼で坂下を受け入れたのだが、ここで皆と暮らすのはやはり無理、適当な病院への入院を前提とした措置変更について森福祉司と電話で打ち合わせる。更に皆を呼んで坂下と暮らす上での我慢について頼むと共に、坂下には

「他人の荷物を勝手にいじっては駄目だよ」

と淳々と注意、幸策には

「大事に至らなかったのだからあまり考えすぎるな」

とだけ話して一件終わりとする。

十一月二十日 小雨

富山は父さんの故郷であり、叔父さんや叔母さんなどを筆頭に沢山の親戚があるのは入校時の書類を読んだ段階で判っていたのだが

「もしもし、平川幸策は元気でしょうか」

と今日突然があって、「どなたでしょうか」と僕が問い返したら、

「私は富山の平川と申します。そちらにお世話になっております平川幸策の叔父で御座います。この度は幸策が大変ご迷惑をおかけして、私共親戚一同本当に申し訳ないと思っております。」

とゆっくりした抑揚で話し、その声と口調が幸策にそっくりでびっくりする。

「十一月二十五日にそちらをお訪ねしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか？」

ー結構です。どうぞどうぞー

「幸策の様子は如何でしょうか？」

元気に暮らしています。幸策君は無口ですがしっかりしていますし、何の心配もなく暮らしています。

「そうですね、それをうかがって安心しました。大変な事件を起こして北海道へ送られたと仙台の役所の人から聞いたものですから、私ども親戚一同の者は本当に心配していました。

では十一月二十五日にお伺いしますのでよろしく申し上げます。」

幸策はグラウンドで体育をしていて電話に出られなかったので、昼食が終わってから「幸策、富山の叔父さんから電話があって、この十一月二十五日に君に会いに家庭学校へ来るそうだよ」と告げたら、幸策の顔が嬉しそうにぱっと輝いた。

「本当ですか?! あんなに遠い富山からわざわざ本当に来てくれるんですか、すごいなあ! どうやって遠軽まで来るんですか?」

飛行機で富山から羽田、羽田から千歳と来て、後は千歳から汽車で来ることになるけど、時間もお金も随分かかるだろうなあ

「凄いですねー」

幸策がこんなに輝くように笑って喜んだのを見るのは初めて、父さんや継母のことを話すときの無表情とは天と地ほどに違う喜びように、この富山の叔父さんと本家筋が将来の幸策を考える上で重要な手がかりになると、僕も何んだかとても嬉しくなって待っている。

十一月二十三日 くもり

今年は例年よりおそく今日から「収穫感謝祭」の各作業班の発表が始まる。

我园芸部は二番目の発表、自分たちのやって来た一年間の仕事を図表やグラフにまとめて全校の場で発表する年に一度の晴れ舞台、晴れがましい場というか人前に立つのを嫌がる幸策なので、出場すること辞退を拒否するかも知れないと思いながら「幸策、やってみるか?」と切り出したら案に相違して

「やります!」

と二つ返事で引き受け、「園芸部の一年の仕事内容」の図表とグラフを自分一人でこつこつと一週間かけて作り上げ、今日は堂々とまっすぐ顔を正面に向けて発表し、川口先生のフラッシュにも全く動ずることなく発表を続け終わったのには僕の方で感動する。大したものだったよ! 幸策。

十一月二十五日 晴れ

二十日の電話どおり遠い富山から叔父さんが訪ねて来てくれ、幸策はにこにこしながら本当に嬉しそうだった。

叔父さんは飛行機の都合で今夜の夜行で札幌に帰られたのだが、忙しい仕事の合い間をさいてこんなにも遠い遠軽まで一人の甥のために訪ねて来てくれただけで僕はもうじんとしていたし、幸策は本当に嬉々として構内を案内して、帰る時は外に立っていつ迄も見送ってそっと涙をふいていたのが非常に印象的だった。

「私共は代々富山で薬屋をしています。

本当は兄(幸策の父)が継がなければならなかったのですが、兄は大学を卒業してすぐに新聞

社へ就職しましたので二男の私が跡を継ぎました。小さな薬種商で市内だけの小売で御座います。先代からの家作もあって、暮らしはなんとか人並みにしています。

幸策の起こした今度の事件、私共はもうびっくりしました。この百年、私共の一族には一人として警察のお世話になった者はおりません。

今度の幸策の起した事件、これはもう兄の家庭の問題から出た事だと思います。

一度離婚したのは判っていましたし、今の兄嫁は性格のきつい人だと言う事も知っています。最初の時は結婚式は東京と富山の二カ所でやって皆で祝いましたが、再婚の時は結婚式もしませんでしたし、結婚後も今の兄嫁は一度も富山に来ていません。兄だけは、幸策を連れて二度ばかり来ました。

どうして幸策がこんな事件を起こしたのかよく判りませんが、おそらく二度目の母親になじめなかったからだとは思いますが。

これから私共に出来ることがありましたらなんでも致しますので、是非御連絡下さい。

幸策は本来なら平川家の跡取りなのですから、なんでも致します。

よろしくお願い致します。」

ゆっくりと話す口調に一族のしみじみとした心配の真情があつて、僕は本当に安堵するものがあつた。

「僕は富山の叔父さんが来てくれてほんとに嬉しかったです。こんなにも遠い遠軽に来てくれたことだけでも大変なことです。

三年振りに会った叔父さんでしたが、すぐに何んでも話し合うことが出来ました。従兄たちのこともいろいろ聞きました。じいちゃんばあちゃんの元気なことも聞きました。

みんな僕のことをとても心配してくれているのがよく分り、もうこれからは絶対に心配をかけないと腹の底から思いました。」

十二月五日 晴れ

暁闇六時、全校で平和山に登る。途中で上衣を脱いでシャツ一枚になった幸策

平和山にトップで登る！

最初から南の前を走って一気に頂上まで登りきったという幸策の素晴らしい体力、まだまだはかり知れない可能性を感じさせる眩しいような今日の幸策だった。

十二月六日 小雪

今日の礼拝、いつもの様に大きく眼を見開いてじっと聞いていた幸策

「僕はキリスト教はやっぱり自殺を教えているような気がする。何故なら、死ねば神の所に行けるのだから「早く死んでこい」と言っているみたいだからだ。だからどうしてもキリスト教は好きになれない。」

そういうことではないと思うよ…と幸策とキリスト教について語り合いたかったが、僕自身、ただ賛美歌をうたっているだけの似非クリスチャンだし、幸策におしまけそうでやる。

十二月十日～十三日

私用で帰郷（函館）したついでに仙台まで足をのばして行って来た。

仙台に言った理由は、(一) 今度の正月帰省が果たして可能かどうかを、地域の状況、家庭の様子をこの眼で見た上で仙台児童相談所といろいろ話し合いたかったこと、その他に仙台児童相談所、仙台家庭裁判所と幸策の将来計画について意見交換をしたかった。(二)は、父さんとじっくり肚を割って幸策の将来計画について話し合いたかったからである。

仙台へ着いてすぐ電話ではなくK新聞社仙台支社を訪ねたのは、K社仙台支社の雰囲気を知りたかったのと、K社の中で幸策の父さんとまず会いたいからだったが、

「平川さんは又休みをとっています。」

という受け付け係のなんとも無愛想な「又」という語調に、K社仙台支社内での幸策の父さんの位置を冷たく感じてショックを受けながら、引越したという新しい住所 青葉区\*\*\*（住所記載略－河原）という珍しい町名の比較的古い広瀬川沿いの住宅街に幸策の家を探し訪ねる。突然の僕の訪問にびっくりした様子の継母だったが、丁度僕に話したい事がいっぱいあったらしく、これは全く同感だからこうして函館から足をのばしてきた訳だし、とに角、まずじっくり継母の話聞いた。

「(1)退院した平川が又大酒を飲み始めました。

(2)私共は十一月三十日までぎりぎり話し合って離婚することにしましたが、平川が泣いて頼むので一応やめました。

(3)この離婚話の始まりは、富山の平川の実家から出た話です。

(4)平川は会社に出始めていますが、会社では自分の仕事がほとんどなくなっているみたいで、ほされ始めた平川が悩んでいる様です。(他人事の様な冷たい口調)

(5)幸策が正月に帰省してくるのを皆で待とうという事には一応なっていますが…私は実は反対なんです。

(6)今日は平川が休みをとって二人で買物をし、私も平川につき合って銚子を六本ばかり飲みましたら、平川が「行きつけの店にツケを払いに行く」と言って私から三万円をとって出かけて行きました。

「ところで先生、幸策はいくらか変わりましたか？」

－入校当初から自分のペースでしっかり暮しています。無口ですが判断力はきちんと持っています。仙台の中学校の友達から毎日の様に沢山手紙が来ますし、幸策も喜んで手紙ばかり書いています。－

「私には幸策に友達が居るなんて絶対に信じられません。あんな変わった偏屈者に友達なんて

居る訳がありません。」

ーそれは違いますよ、幸策は決して偏屈者ではないし、幸策には男子でも女子でも実にいい友達が沢山居ますよ

母さんが知らないだけですー

「そんな事は絶対にありません！

私は絶対に信じません！」

信じる信じないは母さんの勝手ですが、母さんが幸策に友達が沢山居るということを知らないこと自体、大変なことだと僕は思います。

僕のいささか以上にきっぱりした口調に気押されたのか継母、少し低い声になって

「平川には会って行きますか？」

と尋ね返したので、

「勿論、そのつもりで来ました。」

と答いたら、居間の引き出しからマッチの小箱三ヶを取り出して、

「このうちのどこかに平川は居ると思います。

先生が会っていろいろ話してくれれば有難いです。」

と利かん気いっばいの継母が初めて僕に頭を下げたのにはびっくりしながら、継母も可哀想な立場だよなあ～～となんだか無闇に継母が可哀想になってしまった。

幸策の父さんの行きつけの店三軒、

スナック「さゆり」

仙台市\*\*\*（住所記載略ー河原）

スナック「りさ」

仙台市\*\*\*（同上）

スナック「みやび」

仙台市\*\*\*（同上）

僕は近い順に「りさ」にまずタクシーを走らせたが「今日はまだ見えていません」とのこと、次ぎに、「みやび」を尋ねたがここにも又来ていない、今日は河岸でも変えたかなと少し疲れ気味だったが今度は歩いて「さゆり」の扉をぐっと押して中に入ったら、灰暗い店内の鍵の手に

なってカウンターの六つ七つかの真ん中に平川さんがホステスと並んで座っていた。ぐっと日本酒をコップで飲みながら、中のママさんや隣りのホステスに何か懸命に話し続けている。挨拶しようときっかけを待ったのだが仲々（ママ）きっかけがつかめず、僕は反対側の端に座ってビールを注文し、まず静かに飲み始めた。

平川さんから僕の顔半分は見える位置だったが、まさか遠軽の家庭学校の職員が仙台市\*\*  
\*（住所記載略-河原）の同じ店に居るなんてのはおそらく想像外のこと、僕はなんだか幸策の父さんに悪いことをしている様な気持ちになりながら、

しかし、幸策の父さんの話しの面白さに魅かれ始めてじっと聴き続けることになってしまった。

君は幸せかい？

まあまあかな

幸せになれよ！自分が幸せになると思ったら絶対幸せになるもんだよ！

ひーさんは幸せ

僕かあ…あまり幸せではないな…

どうしてさ！ひーさんは大きな新聞社につとめているし、給料だって高いし、今度のボーナスだって仙台では一番か二番でしょうしさ…

そんなことは幸せの基準ではないよ、  
なんというかな…家族の幸せってのはさ、そんなこと関係ないよ…」

そうかなあ？私なんかからみるとひーさんの言っていることは、一種の贅沢ぐらいにしか聞こえないけどー

なあー京ちゃん、俺の家って淋しい家だよ、女房とだって闇のひまばかりだよ、  
闇はひまというよりさ、俺には闇の睦言なんてのはもう二年もないよ

「嘘ばかり！」

こんなやりとりの後平川さんはマイクを握り「赤いグラス」「あざみの歌」「黒い花びら」など次ぎ次ぎに歌った後、今度は短歌を歌いだした、その詠み方は、幸策が修学旅行のバスの中で詠んだ歌い廻しにほんとはそっくりで、僕は思わず目頭が熱くなってしまった。

君に恋いうらぶれば悔しくも  
わが下紐の結ふ手いたづらに

故もなくわが下紐を解けしめて  
人にな知らせ直にあふまでに

恋ふることなくさめかねて出で行けば  
山も川をも知らず来にけり

万葉集はいいぞ！京ちゃん！」

その後ぐんぐん酔ってきた平川さん、文学を語り、日本を語り、マスコミを語ってそれは素晴らしい饒舌だった。大学生の様に饒舌だった。

幸策の父さんの実像はこんなにも明るい人だったのだ。それを知っただけで僕は仙台に来た甲斐があったと感動しながら、僕は平川さんに挨拶することなく「さゆり」を出てホテルにもどりぐっすり寝こんでしまった。

今夜は素晴らしいビールを飲んだ。いい夢を見た。

翌日、錦町に仙台児童相談所を訪ねる。

山田所長も折りよく在所していて、平川幸策君の(1)正月帰省の是非、(2)復学・進学も含めて今後の方向づけ等々について、後から加わった原相談課長、加藤児相相談福祉司の四人でじっくり話をつめる。

その結果、(1)正月帰省は継母との関係からやはり無理であること、(2)は、平川幸策の起した今度の事件で仙台市民が受けた衝撃からして、復学は勿論、仙台市内への高校進学はやはり無理であろうこと、それをおして高校入学を周囲でおし進めても、本人が反って萎縮してしまうであろうことが加藤児童福祉司から述べられ、あれだけの可能性と高い素質を秘めている平川幸策をこのまま中学三年まで家庭学校に在校させて、結果として中学だけの学歴だけで社会に出すべきではないと僕が意見を述べ、これには児童相談所側も全く同感で、今後のことについてはお互いの社会資源を模索しながら検討し合い、連絡し合って方向づけをして行くことで意見が一致して仙台児童相談所を辞し、次ぎは大手町に仙台家庭裁判所を訪ねる。

幸策を担当した立石調査官も折りよく在所していて、担当事件の調査の合間をさいて「調査官室」でお会いする。まだ若い女性の調査官で、幸策の家庭学校での生き生きした様子を話したら非常に喜んでくれて、

「本当に安心致しました。随分裁判官も悩みましたし、私も調査すればする程『家庭には帰すべきではない』という思いになりました。

宮城県の教護院ではあまりに仙台市内ですし、大変な御無理を承知で管轄外の家庭学校にお願いしたのですが、元気で立ち直っているとうかがい、本当にほっとしています。

今日は武藤裁判官もおられますので御案内します。」

と今度は「裁判官室」に案内して頂いて、幸策を担当した武藤裁判官とお会い出来たのも望外の有難いことだった。

幸策の生き生きした様子や行動、日記に書いている意志表示などをお話すると非常に喜ば



れると共に、ほっと大きく安堵した表情を温かく見せて、なんだかずっと以前からの知り合いの様な雰囲気になって、以後僕は「裁判官室」とはそもそもいかめしいものではなく、人間的なぬくもりのある場所であることを知ってとっても好きになった。

十二月十四日 晴れ

帰校。すぐに谷校長に委細を報告、すべての諒承を得る。

十二月十六日

今日は「全校学力テスト」、幸策は

国語 九八点 全校八十五名中 一位

数学 八二点 全校八十五名中 三位

年に三五名内外が一月～二月にわたっていつでも入校し、同じく年に三五名内外が一月～十二月にわたって同じく卒業して常時八十五名の少年が、それも年齢差でいえば十二才から十七才、学力差で言えば小二から中二ぐらいのばらつきがある家庭学校の授業は、教える側も勉強する側も仲々(ママ)大変なカリキュラム設定を余儀なくされて容易ではない。そんな中で年三回行われる「全校学力テスト」は、その時々全部の少年の学力の状況、進捗の状況を把握すると共に、カリキュラムの設定、復学と進学を考えて行く場合の資料集積 等々に大きく役立つと共に、全校を一つにしての切磋琢磨の場として、一人一人の意気ごみを俯瞰できる貴重な場としても重要だと職員も生徒も認識しているだけに、今日のテストで幸策が国語で一番、数学で三番をとったのは全校の注目を一挙に集めることになった。

「幸策ってさ、普段はなんにも言わないけどさ、ほんとはすごい頭がいいんだな！」

と口々に言いながら廊下の掲示板にむらがって見ていた中に肝心の幸策の姿はなく、寮に帰って誰も居なくなってから一人でじっと見ていたのが、又如何にも幸策らしかった。

東大を目指している四才年上の坂下は、国語は七十点で十六位 数学二十二点で六十八位 ショックを受けたか坂下は寝こんでしまった。

十二月十八日 雪後くもり

いつも陽気に喋りまくり騒ぎまくっている田中、年令は同じだが何もかもが正反対の田中と幸策はだから極端に仲が悪い。

いつも攻勢をかけて行くのが田中、喋って喋って幸策を言い負かしてしまう。どんなに自分に分がない時にも、と角、口先き一つでは幸策に優位に立ってしまう田中に、幸策はじっと我慢してこらえているのはその無言で睨み返す眼の光を見るとよく分る。

今日もいつもの様に喋って喋っていた田中が、どうしたことか途中で静かになってしまいは半泣きになって一枚の紙を持って来た。

「僕の部屋にこんな札が釘で打っています。」

と眼にとっぴり涙をためて持って来た。

室名 霊安室  
お名前 フランケンドラキュラ様  
お荷物 A型とB型の血液二箱  
出立 一月一三日 金曜日  
行先 地獄

これでは流石の田中でも泣いてしまうのも無理はないと思い、「僕がやりました」と申し出た幸策に、「こんな事をするものではない」と言って注意しておく。

しかし、皆も田中も僕の家内までも加わっておさまらない様子で、

「先生は幸策を依怙最真しています。同じ様なことをしても僕等ががんがん怒鳴られるのに、幸策には静かに注意だけして終ります。

それは完全に依怙最真です。」

と皆を代表したかたちで安田がきちんと抗議し、家内は

「あなたは、私から見ても幸策君を別扱いしている様に思います。」

と怒ったように言い、僕は幸策という非凡の神器に自分でどう対応すべきか考え考え暮らしている部分がか確かにあって、教護院の寮長として初めて迎えて正念場のような気がしている。

十二月二十一日 小雪

今日は正月帰省についての最終職員会、「帰省出来る資格はあるが、家庭の状況から残留させる生徒」として平川幸策の名を挙げ、仙台で感じた家庭の様子と仙台児童相談所との協議の結果を詳細に報告して承認を得る。

更に、今年の正月は僕達夫婦の休暇にあたっているが、幸策の両親が来る予定になっていること、年末年始をはさんでくる手紙、出す手紙、くる電話、年賀状の往来等について寮長として承認しておかなければならない事をあげて、休暇の返上を申し出てそれも承認を得る。

職員会が終ってから幸策を僕の茶の間に呼んで、正月帰省できないことを話す。

「幸策、結論から言えば君は正月帰省できない事に決定した。これは単なる家庭の事情というよりは、君の父さんと母さんは十一月末にぎりぎりの対立となって離婚することになったが、なんとかそれは回避して(幸策の正月帰省を待つ)ということで父さんと母さんの意見は一応一致したが、それは幸策が一番よく分かっているようにうわべだけの取りつくろいであることは、僕がこの前仙台に行ってよくよくこの眼で見えて来た。

仙台の児童相談所も、家庭裁判所も家庭学校の判断に一任すると言っている。僕は随分考え続けて来たが、やはり今度は帰省しない方がいいと思って今日の職員会に提案し、決定となった。校長先生も他の先生も随分残念がっているが、最終的には僕の決定を承認して頂いた。君

にとっては辛いと思うし、悔しいと思う。しかし、長い眼で見れば、今は帰省しない方が良かったと後で分かってくると思う。恨みたいなら誰でもなく藤田をずうっと恨めよ」

と出来るだけ淡々と話したら、僕の顔をじっと見つめていた幸策の目にとっぴり涙がたまって来て、しまいにはほとんど一粒二粒涙が床にこぼれて、僕も泣きたい気持ちになっていた。

十二月二十六日くもり後雪

「今日から一月八日まで正月帰省」

次ぎ次ぎに十一人が帰省して行った。

わいわい楽しそうに嬉しそうに、それぞれの家族の待つ家に帰省して行った。

安田と二人、広い寮内に淋しく残った幸策、長い日記を久し振りに書いて必死に自分の気持ちを鎮めている。

「僕が今度の正月帰省で残留するのは、帰省出来る資格があるのに残留するのは、両親が又離婚するかも知れないということ、僕が仙台市内に姿を見せたら又世間が騒がしくなってしまうかも知れないこと、十二月三十日から三十一日にかけての今年一年の事件ニュースで僕のこと放送されるだろうことなどが考えられます。

でも僕は、今度の帰省に帰れたら、そういうことに耐えながら生きていくと心の中で思っていました。そういう厳しい試練に耐えてこそ自分は自分の起した事件を反省して生きて行くと思っているからです。僕は回りの人からどんなに白い眼で見られても、ひどい仕打ちに合っても、いくら写真をとられても、決して反抗したりしないで、我慢して、我慢して、我慢して生きて行かなければならないのです。それが僕の刃傷のつぐないです。それは肉体的な激痛ではなくて、精神的な心の激痛です。でも今は、そんな無理な思いをして帰省しなくても、今年一年の反省のために残ることも必要だと思う様になりました。

新年が明けたら、僕は素直で善良な心に入れ替える為にもう一度神佛に祈り、お守りを綺麗にふいておこうと思います。

そしてどの様に祈るかという、次の様に祈ります。

『人に対する愛情を豊かにして、それから優しくなって、心を広く持って、人情深い社会人になって、一生の間中他人から喜ばれることをして生きていく』

と祈ります。

自分が今度家庭学校に残る意味は、きっと僕を辛く苦しい目に合わせない為と、両親の仲をどうにかして良くする為には、今は僕が帰らない方がいいと藤田先生が判断したからだと思えます。だけれども、僕が今度帰省してもしなくても、いつかあの両親は離婚すると僕は思っています。そして、それはどっちでも僕には関係のないことです。

僕は明日から又頑張って生きて行くだけです。」

十二月二十七日 雪

仙台の友達、中学校の先生、本橋のおばちゃんなど十八名の人に年賀状をだす。  
十二色の色鉛筆で明かるく書き上げているとても素晴らしい年賀状十八枚、昨日の日記とはそれは別世界の明かるい明かるい年賀状にうたれている。  
そして当の幸策、図書館から借りて来た夏目漱石の「こころ」を黙々と読み続けている。

十二月二十九日 晴れ

継母から電話

「本当にいろいろと有難う御座います。  
申訳ないと思っています。幸策が来れないのならこちらからも皆で行こうという事になり、一月二日に皆で伺いますのでよろしくお願い致します。」

幸策にそのことを告げたら、

「ああそうですか」

と全く無表情な返事が返って来ただけだった。

一九七九年一月一日 晴れ

さあいい天気で今年が始まった。

新年の式の後に残留している生徒二十二名と残留の職員全部で記念写真をとったのだが、あれ程写真に写るのを避けていた幸策が十一月二十三日の園芸部の発表以来堂々とカメラの前に立つように成、今日も谷校長のそばで少し微笑さい見せて立っていたのが眩しかった。

夜、父さんと継母から電話、二人ともかなり酔っている感じで、

「幸策をお・おお願いします」

と呂律が回らない口調で言い、すぐ幸策を呼んで代る。

「ハイ…ハイ…ハイ…分かりました。」

と三十分もの長い電話の中で幸策が言ったのはこれだけ、にこりともしないで電話を終わった幸策は、

「親はいろいろと言訳のような事ばかり言っていました。明日来ると何回も言っていましたが、今夜こんなに酒に酔っていて来れる筈はないと思います。絶対に来ないと思います。」

と断じて、自分の部屋にすたすたとどっていた。

「二日に行けななければ三日か四日には必ず行きます。」

と僕に言っていた父さんと継母の姿を思い出しながら、たしかに呂律は回らなかったが口から出まかせを少なくとも親がする筈はないと思い、まずは待ちたいと思う。

そしてその時に、幸策の父さんと二人きりで遠軽の街に出て、僕の行きつけの「春駒」か「遠軽軒」でしみじみ飲み合いたいと思ってもいた。

一月五日 雪後晴れ

二日、三日、四日と待ち続けたが、幸策が断定した言葉通り、幸策の両親はやっぱり来なかった。

来れないなら来れないでどうしてあの様ないい加減な言葉でその場を取りつくろうのですか。仙台から遠軽までどんなに遠いかはよく分かっています。しかし、仙台よりもっと不便で遠い富山から約束した日と時間に叔父さんはきちんと来てくれました。

人間同士のつき合いというかモラルというのは、そういう基本的な約束からまず成り立つものではありませんか。！

「僕は考えれば考える程、僕が正月に帰省出来ない理由と訳がもっと別にある様な気がします。親は来て来なくてもいいんです。

大して当ても頼りにもしていませんから来て来なくてもいいのです。だけど仙台に帰省して、友達と本当のことをいっぱい話したかった。もう少して帰省が終わる今頃になって、正月帰省出来なかった悔しさが段々深まって来ました。」

一月八日 雪

正月帰省が終わり十一人が続々と帰って来て、寮の中は又普段の賑わいと明るさを取りもどした。久し振りの故郷の町の様子や友達との再会、今流行している歌や服装、今人気の歌手やグループ、そしてそれらの音楽テープ、盛り場の賑わいなどを大きな声で笑い合いながら喋り合っているいつものながらの夜、幸策は夏目漱石の「こころ」を自分の気持を鎮ませるかの様に今日も黙々と読み続けている。

一月十日 くもり後雪

今日は正月の帰省も終わり、今年初めて全校揃っての礼拝、

「校長先生の話は、残留中に遠軽劇場に行ってみた映画『駅』の話でした。高倉健の主人公はとても正しい事だけを実行する男で、人間として間違ったことをした先輩を射殺したことについて、校長先生の感想を言っていました。僕はさすが校長先生は大人でもあるし、日本でもかなり良い大学を出ているせいもあって、主人公の奥さんの気持ちや、飲み屋の女主人桐子という人の気持ちも正確に説明して、その感想もすごいと思いました。

だけど僕の感想とはちょっと違います。

僕の『駅』の感想は、高倉健の奥さんは函館の駅から列車に乗って行ってしまったけれど、あれは絶対に行くべきではないし、どうしても行くというなら、高倉健は警察をやめて後を追って行くのが本当だと思いました。」

一月十七日 雪

今日は一月の朗読会、入校して初めて幸策を出場させたのだが、幸策は「残留生活の思い出」と題して淡々と作文を書いて淡々と読んだ。そして夜の日記に次の様に書いている。

「今日、僕は初めて朗読会というものに出ました。先生が出れと言ったから出ただけで、全校の先生や生徒の前で本当の自分の気持など言っているものではないし、出来るだけ簡単に作文にしてそれを読みました。そしたら皆さんが拍手してくれて、今もへんな気持です。

一月二十一日

「先生、朗読会では読みませんが、読書の感想文を書いたので持って来ました。読んで下さい。」

とわざわざ言いに来て持って来た。

寡黙な幸策は、人が喋ったり笑ったりしている時はほとんど本を読んでいる。今読んでいる「こころ」の感想文かなと思って受け取ったら、下村湖人の「次郎物語」の感想文、

里子に出された幼名虎太郎、後の次郎がたどった幼ない心の軌跡の物語、幸策がどの様に読みとったか急に興味が湧いて来て一気に読む。

「僕は去年の七月十日に仙台少年鑑別所に入り約一ヶ月間の間に色々な本を読みました。その中には五日間かけてかかって読んだ『次郎物語』があります。次郎物語は下村湖人という人が書いた第一部から第五部までの自伝のような長編小説です。でも次郎物語は作者の死によって未完成のままで終わりました。

物語の主人公は小さい頃は虎太郎といい五才から次郎とよばれ、次郎は生まれた時は猿みたいな顔をしていて、おばあさんや母は『なんて小にくたらしい顔をしているんだろう』と思ったそうです。母は乳が出なかったので、田舎の学校の用務員室に住んでいるお浜という女の人にあげられて育ちました。

やがて次郎が里子から帰って来た時は、本田家が嫌で嫌で毛嫌いしました。そして毎日ひねくれてばかりいました。そしておばあさんは、母さんのお民が居ない時に食べ物で次郎をいじめるのです。

そんな或る日、次郎は何故か別の部屋にあったお菓子の入っている箱を見つけて、その箱を壁にたたきつけて踏んだり蹴ったりします。又、その他に兄の小学校の教科書を便所に投げたりしました。そのようにいつも次郎は家庭に仕返しばかりして来ました。

やがて次郎は小学校に入学して、六年生の演説を聞いている時に、みんなびくびくして下を向いているのに次郎だけは演説している人の目をにらみつけていました。それをみたその六年生は勘にさわって怒り、次郎と言い合いをして殴り合いになりました。

そして何年かたって次郎が小学校三年生の頃に、お浜の引越しの話や小学校の建て直しなどの話があり、次郎は五才まで自分を育ててくれたお浜たちが引越した後のお浜の部屋の土台に座り、小さい頃から今までの事を思い出していました。その頃の次郎は小さいながらも勇気と腕力があり、いつも喧嘩をしたりしていました。そんなある日、次郎と仲間たちが遊んでいる時に、誰かが次郎の兄がやられていると言って来ました。

次郎はいくら兄が憎らしくても兄弟だと思ったかどうか分かりませんが、とに角兄を助けに行きました。

そして川に落ちても取っ組み合って泥だらけになって、夕方おそく帰って来てどんなに叱られるかと思ったら、昼間あった事を兄が全部母たちに話していたので次郎は反対にほめられました。又、次郎の兄だったか弟だったかが父「じゅんすけ」の大事にしているソロバンを壊してしまいました。そして父の部屋に呼ばれてソロバンの事を聞かれましたが、ソロバンを壊したとは誰も言いませんでした。

そして母は三人にある話をしてから次郎をうたがいました。次郎は兄だか弟だか分からないけれど人のやった罪を自分がかぶろうと決心しました。次郎は強く叱られ、風呂場にずっといました。その時に戸がカタカタ音をたててなってから兄弟の一人が帰入ってきて、自分がソロバンを壊したと白状して次郎にあやまりました。次郎はその事を秘密にして最後まで兄弟の罪をかぶりました。

僕はこの次郎の根性が好きです。そのあとしばらくして次郎は母を失いました。お葬式の時にお浜も来て何年振りかの再会をしました。それからの次郎はまるっきり性格が変わり、本当にすごい成長をしたなと思いました。

僕はこの次郎の苦労したところと、その後の成長した姿がとても好きです。小さい時から苦労したり我慢したりした次郎の様に、僕もそういう生き方をやってみたいと思います。

次郎物語は第五部で未完成のまま下村湖人という人は亡くなりましたが、その後の第六部、第七部も読みたかった気もするし、第五部で未完成のまま終わっているからその後の次郎の姿を想像できるからいいという気もして、今もそのことを時々考えています。」

去年の七月に読んだ「次郎物語」の感想を今になってもこの様に刻(ママ)明に書ける幸策の気持ちを思い、次郎と自分の人生をびったり二重映しにして今を生きる幸策の凜とした気概を思い、今日も又いい文を読ませてもらった。

そして、いつの日か大人になった幸策と、今幸策が黙々と読み続けている夏目漱石の「こころ」について語り合える日の来るのがとても楽しみになって来た。

一月二十六日 雪

「僕はどちらかといえばマンガよりも小説が好きですが、マンガの中では(1)機動戦士ガンダム (2)宇宙戦艦ヤマト (3)キャンディキャンディ (4)愛と誠 (5)超人ロック の順に好きです。そして『機動戦士ガンダム』を書いている作家がこの遠軽出身だというのはすごいことだと思います。

こんな田舎からそういう人が出たということがすごいです。だから僕たちも大丈夫だと思います。」

(だから)と表現している今の日々の肯定感が面白い。

一月二十八日 曇り

一二月一八日の一件以来互いに波風立てない様に努力している感じの田中と幸策、そんな田中が書いて来た今日の日記にうたれている

## 田中の日記

「僕は幸策君と一緒に除雪したり、薪を切ったり、掃除をしたりするのが段々好きになって来ました。僕は喋り過ぎるけれど、幸策君はほとんど物を喋らないで真面目に仕事をやり続けます。そして絶対に仕事を誤魔化しません。僕は時々誤魔化すし、他の人も大体そうですが、幸策君が違います。

それでいて威張った口はきかないし、すごい勉強が出来るのを知ったかぶりもしません。これからも幸策君と一緒に仕事をさせて下さい。お願いします。」

この逆の訴えはもうお互いにしょっちゅうあるのだが、このような依頼は寮長になって初めてのこと、又一つ幸策の素晴らしさが見えて来た。

二月一日 晴れ後雪  
今日の発育調査の結果

|    |          |      |           |
|----|----------|------|-----------|
| 身長 | 一六〇、六 cm | (入校時 | 一五八、二 cm) |
| 体重 | 五四、二 kg  | (入校時 | 四四、一 kg)  |
| 胸囲 | 八一、五 cm  | (入校時 | 七二、二 cm)  |

入校して七ヶ月、眩しいくらいにぐんぐん男らしくなって来た幸策、身長で丁度全国平均、体重と胸囲はもう平均をはるかに超えているし、特に胸囲の八一、五 cmは大したものである。

二月五日 くもり後晴れ  
今日はスキーでの山廻りかねて、全校で平和山に登る。一二月五日に初めてトップで登った幸策、一月は登らなかったので二ヶ月振りの平和山登山だったが、

今日も平和山へ一番で登った！

スキーに乗っての登山は歩いて登るよりもはるかに辛い難行なのだが、二番を百米も引き離して登り切った幸策の体力と頑張りには改めて瞠目している。

二月十日 くもり  
今日から三週間をかけてのスキー大会が始まった。今日はまず神社山での回転競技、優勝を狙っていた羽田や四谷が二回目を失敗して意気消沈している中で上位に入ったのは坂田一人だけ、そんな中で蔵王スキー場で二、三度スキーを滑っただけという幸策の滑りを注目して見ていたのだが、一回目も二回目も如何にも幸策らしい慎重な滑りで合計タイム

四二秒六 二六位

はいぶし銀のようなそれは見事な順位だった。



二月十三日 雪

家庭学校からの卒業（退所）は中学三年を卒業したから即卒業というのではなく、一人一人の入校理由が除去又は改善されたと寮長が職員会に提議し、様々な角度からの検討を経て合議承認を受けて初めて卒業となる。

入校して来るのが違う以上一人一人の在校期間はどうしてもまちまちになるが、卒業はもう皆の夢のまた夢。

我が寮の二月中の卒業予定は年長の奥山と坂下の二名、坂下の場合は帯広市立病院への入院を前提としての措置変更、続いて三月は 小林、南、花輪と予定して、去年の秋頃からそれぞれ復学（二名）と就職（一名）を計画して家族の話し合いと中学校、児相相談所との話し合いを十分に重ねて、三月にはもうぼんと肩をたたいて送り出すだけになっている。何よりも強い説得力は、三人とも二年から三年を家庭学校で暮して見事な成長を見せている好青年だということである。

この様な様々なことを考え合わせながら、僕はなんとかして幸策も中学校に復学させることはできないものかと、二月に入ってから特に思う様になった。

入校してまだ七ヶ月、平均在校期間二年という皆とのバランスを考えれば、僕がいくら幸策の素晴らしさを推輓しても幸策を中学校に復学させることは容易ではない。

しかし、幸策が全く管轄外の仙台から入校している事、それも特別な依頼を受けての入校となっているだけに、卒業についても特別を受けてもいいのではないかという思いが一つと、更に幸策の起こした事件の社会的反響の大きさから、家庭学校を卒業しただけの仙台での就職はまず絶対に無理であろうこと、又、来春、中三卒をもって家庭学校を卒業させて仙台へ帰って高校を受験させるというのは、仙台での幸策の知名度からしても至難であることを考えると、来年では八方ふさがりになるのは眼に見えている。

そんな思いの中で脳裡に閃いたのは富山の叔父さんのこと、元々富山は平川家先祖代々の土地だし、仙台での事件など叔父さん以外は富山の人は全く知らない。

この春の中学三年復学なら単なる転入学手続きの書類だけで通過する。来年まで家庭学校に居てもしどこかの高校を受験するとすれば、現在の幸策の在籍校仙台市立A中学校からの受験となり、どうして中三まで北海道家庭学校という教護院に在籍したかの詮索から始まって、当然仙台での幸策の事件は隠す訳にはいかないから判ってくる。

又、ぶっさら棒で決し愛想の良くない幸策は、周囲の人特に初対面の人に好印象を与えないし、面接でも高校受験に不合格になる確率は非常に高くなる。

幸策をまず中学三年に復学させ、来春、高校をして大学へと進ませる軌道を敷くのはこの春しかない、という結論に達した僕はまず谷校長に相談して諒解を得ると共に、職員会での様々な反対意見に対して何度も何度も説得を重ねてようやく合議決定を得る。

その上ですぐ仙台児童相談所の山田所長に僕から私信のかたちで、

○平川幸策君の今春の中学三年への復学。

○復学先は富山の叔父の許に寄宿しての富山市内の中学校

を主内容として、仙台児童相談所の意見を求める。

五日程して山田所長から速達で返信、

「富山の叔父の許へ帰っての復学、その叔父の人柄と性格を家庭学校が知悉した上で進め得るというのであれば、私共はもう大賛成です、私共は全て家庭学校の判断に従います。」

すぐ仙台の父の許に幸策君の近況、今後の希望をふまえての僕の考え、富山から来てくれた叔父さんの言葉などもまじえて、富山へお願いしての中三復学についての意見を問う僕からの私信を速達で投函。

五日後、速達で達筆の返信、

「私と家内でよくよく相談しました。家内は初めは強硬に反対しましたが段々に賛成に変わって来ました。」私は今も迷っていますが、先生のおっしゃる点の一つ一つその通りでありますし、富山の私の弟の性分を考えると幸策を頼んでもよくやってくれると思います。富山で中学三年に入り、高校も富山、大学はその時になっての幸策の実力次第で決めるというのは、幸策にとって一番いい道かも知れないと思う様になりました。

富山の方には私からお願いの手紙を出しますので、しばらくお待ち下さい。」

二月二十七日 晴れ時々小雪

雪像コンクール

「鮭を食べるクマ」 二十七位

二月に入ってからのでん寒い寒さの中、一人一人が本当に頑張って作り上げた寮庭の十三基の雪像、一人一人のパーソナリティが一基一基伝わって来て僕は十三基全部が努力賞だと喜んでいました。

初めて雪像を作った幸策、仙台とはけたの違う連日の氷点下二十度ー二十五度の中で黙々と頑張って完成させた「鮭を食べるクマ」、決して精巧な作品ではないのになんともいえない温かい人柄ーいや熊柄か？ーを感じさせるそのクマの表情のコミカルな詩情が全校八十五基中の二十七位に入ったのだと思う。

いい思い出が又出来たなあ！幸策。

三月二日 快晴

朗報、富山の叔父さんから快諾の手紙

「仙台の兄からの依頼、承知しました。家内も私の子どもたちも喜んで待っています。元々幸策は平川家の長男、幸い私共の家作りのアパートの一部屋があきましたので、そこに幸策を住まわせると共に、食事は母屋で私たちの一緒にとすることにします。

いつ来てもいい様に準備は出来ました。」

すぐ谷校長、加藤教務部長に報告して諒承を得ると共に、仙台児相相談所に幸策の「退所申請書」を公文書として発送。

三月三日 晴れ

卒業生の塩越君が恋人を乗せた赤い車で初めてやって来た。八軒中学校のエースキッカーとして札幌中にその名をはせた塩越、サッカーで有名な高校からサッカー入学を何度も誘われたが、結局行けなかった。

教護院に入っていたからと言うのが理由ではなく、三人目の継母がその高校長に出した「息子の悪口を書きつらねた手紙」故に入学できなかった。そんな六年前の辛い記憶を胸にしているのは僕だけで、わっと赤い車を取り囲んだ皆と塩越とその恋人の明かるい歓声にはもう春の香りがいっぱい、今日はそうお雛さんの日だった。その歓声の中には幸策はいないだろうと思っていたらちゃんと幸策もその魅力的な赤い車に見とれていて、なんだかほっとしていたのは何故だったろうか。

「サッカーをやっているの？」

と尋ねたら、

「朝野球というはあるけど朝サッカーはないので、きっぱりサッカーをやめました。」  
とにっこり答えていた塩越、生みの母は家庭学校の真西の方角、富美に居ることなど全く知らないのである。

三月七日 雪

今日の礼拝で谷校長が話された「有神論と無神論」、皆しんと静まり返って居眠りする者など一人も居ないそれは厳しい迫りに満ちた話だった。礼拝からの帰り途の南と幸策の会話、

南 「神様ってほんとに居るのかな？」

幸策 「神様が居るかどうかは分からないけど、悪魔は絶対にいるよ！」

三月十日 小雪

今まで幸策に富山への復学の件を全く話さなかったのは、すべてのことが確定し、確認する迄話すべきではないと思ったからである。

「幸策、

今日まで黙って来たが、君は三月下旬に富山の叔父さんの家に寄宿するかたちで四月から富山の中学三年に復学する。

本当は仙台の元の中学校にもどって中三に復学するのが君にとっては一番望ましいことだとは思いますが、それは仙台のことを考えてもまず無理であろうことは君自身がよく分かってくれると思う。

来年まで家庭学校にいて来春、仙台の高校を受けるという方法もあるが、正直言って必ず合格するという確率は低い。

来年、家庭学校を卒業してすぐに日本のどこかで就職するという事も考えられるが、君は絶対に高校へ行くべきだし、行け。

高校を卒業して君の実力次第で大学へも道は開かれるのだから。  
富山は平川家先祖代々の地、叔父さんも従兄たちも大歓迎で待っている。  
高校へ入って夏休みにでもなったら堂々と仙台に遊びに行け！  
仙台が別の景色に見えるぞ！きっと。  
父さんが毎月五万円づつ富山へ送金することに決まっているし、大学に合格したら更に倍増して送ることになっている。

仙台の児童相談所も家庭裁判所もとても喜んで諒承しているから、君はもう四月から世間の目など全く気にしないで自由に、伸び伸びと生きろ。やりたいことを思いっきりやってみろ！」

びっくりして僕を見つめていた幸策、その大きな眼にキラッと光っていたのはどんな涙だったのだろうか！

三月二十日 晴れ

幸策が父さんと共に発って行った。わずか八ヶ月しか居ないで卒業して行った幸策に「平川はまじめだから」と皆あっけない位に諒解してくれて、喜んでくれて、その皆の寛大な気持ちに感謝しながら僕も家内も、皆と一緒に二人の乗ったタクシーを見送った。

幸策の最後の日記

「僕は富山に行って中学三年に復学します。

本当は仙台の元居た中学校に復学したかったのですが、それは先生の言う通り無理だということがよく分かりました。

富山は小さい頃から時々行ってよく知っていますし、叔父さんも叔母さんも従兄たちも本当にいい人で、僕は安心して行きます。

僕は家庭学校に来て本当に良かったと思うし、消極的だった僕の性格も僕なりに少しづつ積極的になって来たと思います。

わずか八ヶ月で卒業させてくれて有難度う御座いました。

仙台の中学校の日原先生と沢山の友達、仙台の警察、僕に寛大な決定をしてくれた家庭裁判所の調査官と裁判官、優しく言葉をかけてくれた児童相談所の先生方と少年鑑別所の皆さん、本当に有難度う御座いました。

そして北海道家庭学校の谷校長先生と全部の先生と生徒の皆さん、本当に有難度う御座いました。

僕は絶対に失敗しないで中学校を卒業し、高等学校を卒業し、できたら大学を卒業して必ず世の中に役に立つ何者かになります。

平川 幸策」

その後の平川幸策の軌跡

一九七九年 四月  
富山市H中学校三年に復入学

一九八〇年 四月  
富山県立Y高等学校に入学

一九八三年 三月  
同校卒業

手紙

一九八二年 九月十日

「先生お元気ですか。僕も元気です。

先生にはなんとなく知らせ難くて今まで黙っていましたが、僕の両親は去年の春に離婚しました。母は実家のある群馬の前橋に帰って妹と暮しています。父は離婚と同時に会社を辞め、今は大阪で、一人で生きています。

天王寺の小さな食堂で出前をしています。

信じられないことですが酒は全く飲みません。それは自分の意志で酒をやめたというよりは、もう酒を飲めない体になったからだと思います。出前が終ると自分のアパートに帰って本を読んでいるかテレビを見るかの様です。離婚する時に、それまでためた貯金七百万を母にやり、退職金は僕の学費と生活費として貯金したそうです。

こうして僕の家族は解散しました。

仙台には先生の言った通り高校二年の夏に行って来ました。既に僕の家は仙台にはなく、友達に会いたい一心で仙台に行ったのに、仙台へ行ったら金縛りに会った様にどこへも行けなくなったのです。サングラスをかけて歩き始めた僕をおそらく昔の友達でさい判らない筈なのに、何んだか歩けないのです。

僕は仙台駅の展望レストランで昔住んでいた上杉方面を見つめながら、あの頃自分は自殺することばかり考えていたこと、狂った様に道づれにしようとしていたあの子供に対する申し訳ない気持ちで、やっぱり仙台の町は歩けず、二時間ばかり仙台駅付近を歩いただけで帰って来ました。

もう仙台へ行くことはないと思います。

僕は高校を卒業したら大学には行かないで働きます。働いてお金をためて、やっぱり外国へ行くことにします。

先生も元気で頑張ってください。」

僕はふっと大きく溜息をついて何回も読み返した。

その後、年賀状に必ず五、六行近況を書いてよこしていた幸策。

手紙

一九九〇年五月

「先生、しばらく手紙を書かないでどうも済みません。その後の事をいろいろ書きます。

僕はこの頃妙に有名になったS急便で働いています。この会社は面白い会社で、一日も休まないで働くと他のどんな会社よりも高い給料を稼げるのに、一日でも休むとどんと下がります。

僕の様な若くて体の丈夫な人が働くには一番いい会社です。それにトラックの運転手という仕事は、僕の様な性格を積極的な方へ変えていく力もあります。

父さんは去年の夏に亡くなりました。

とても暑い日でした。机の引き出しには僕の名前と住所を書いた紙があり、家主さんが電話で知らせてくれて僕はすぐ大阪へ行きました。叔父さんも行くと言ってくれましたが丁寧に断りました。父さんはきっと一人で人生を終りたかったのだと思ったから、僕一人だとむらうのが本当だと思ったからです。

父さんの死顔はとても安らかでした。

父さんはなんだか死ぬ日のために生きていた様な気がします。僕は葬儀屋さんを頼んで父さんを火葬場へ運び、僕一人だけでお骨を拾い、僕一人でお経をよみました。

お経は僕がいつも持っているのを持って行ってよみました。お経にはふり仮名がついているのできちんと読めますし、意味も大体わかります。

僕はお経を読むのも書くのも好きなので書きます。

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり生死の中に佛あれば生死なし但生死即ち涅槃として欣うべきもなく比時初めて生死を離るる分あり唯一大事因縁を究盡すべし人身得ること難し佛法値うこと希れなり今我等宿善の助くるに依りて己に受け難き人身を受けたるに非ず遇い難き佛法に値い奉れり生死の中に善生最勝の生なるべし最勝の善身を徒らにして露命を無情に風に任すること勿れ無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん身己に私に非ず命は光陰にうつされて暫くも停め難し紅顔いづくへか去りにし尋ねんとするに跡跡なし熟観ずる所に任事に再び逢うべからざる多し無情忽ちに至るときは国王大臣親暱従僕妻子珍寶たすくるなし唯独り黄泉に趣くなり己に随い行くは只是れ善悪業等のみなり今の世に因果を知らず業報を明らめず三世を知らず善悪を辨まざる邪見のとも侶には群すべからず大凡因果の道理歴然として私なし造悪の者は墜ち修善の者は陞る毫りもたがわざるなり若し因果亡じて虚しからんが如きは諸佛の出入あるがべからず祖師の西来あるべからず善悪の報に三時あり一つには順現報二つには順次生受三つには順語次受これを三時という佛祖の道を修習するのは基最初より斯三時の業報の理を効い験らむるなりしかざれば多く錯まりて邪見に墮つるなり但邪見に墮つるのみに非ず悪道に墮ちて長時の苦を受くまさに知るべし徒に邪見に墮ちて虚く悪業を感得せん惜しからざるや悪を造りながら悪に非ずと思ひ悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて悪の報を感得せざるに非ず

なんだかこうしてお経を書き終えたら気持ちが落ちついてきました。

僕は今まで「絶望という名の電車」に乗っていた様な気がしますが、今はその電車から降りた様な気がします。これから益々頑張ってお金をためます。 さよなら 」

一九九四年 一月一日

手紙

「新年お目出度う御座います。先生はとうとう故郷の函館へ帰ったんですね。

僕がもし六十才になって故郷へ帰るとしたら、東京の様な気もするし、仙台の様な気もするし、富山の様な気もするし、遠軽の様な気もするし、なんだかとても考えこんでしまいます。

富山へ来て二度だけはっきり見る事が出来た蜃気楼の様に、僕の今までの人生は蜃気楼だった様な気もして不思議な気持です。

話は変って大分お金もたまったので、一月中にはまずイギリスに行きます。  
着いてから又手紙を書きます。」

一九九四年 二月二十六日

ロンドンから手紙

「先生、元気ですか。

僕は一月二十三日にロンドンに着いて暮し始めました。まずイギリスに来たのは、英語の勉強をきちんとやる為と、日本人とイギリス人の物の考え方の違い、家庭のあり方の違いなどを知る為です。父さんがよくイギリスの小説を読んでいたこともあります。

イギリスには多分五月いっぱい住んで、次ぎはフランスかスペインに渡ります。お金はあまり使わないようにする為に、仕事があるとどんな仕事でもします。その時には家庭学校で働いた色々な経験とS急便で働らき通した根性と体力がすごく役に立ちます。

フランスに渡ったら又手紙を書きます。

平川 幸策 』

うーん、大した奴だなあ！幸策は。

\*本研究はJSPS科研費 25590227の助成を受けたものです。